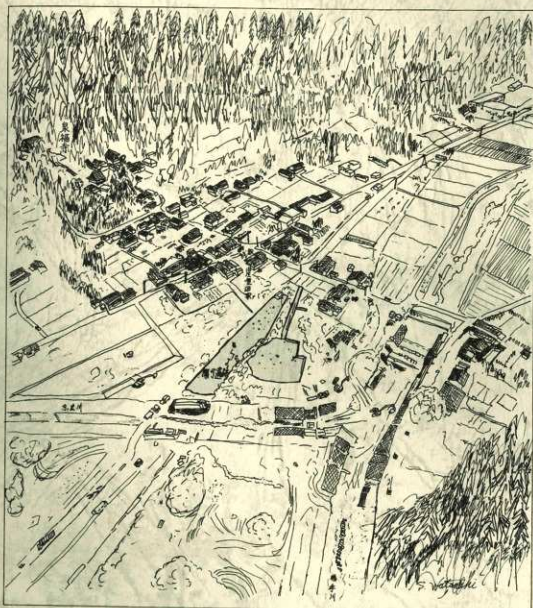


大分県文化財調査報告 第93集

横手遺跡群

発掘調査報告書



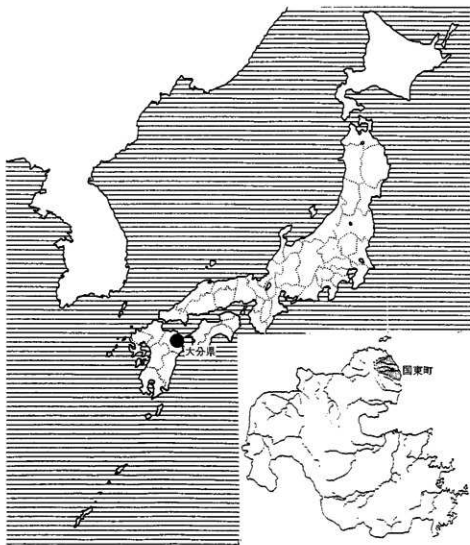
1996

大分県教育委員会

大分県文化財調査報告 第93集

横手遺跡群

発掘調査報告書



序

県道豊後高田・国東線の道路改良工事及び、2級河川横手川の流路変更に伴う河川改修工事は、地域間交通の改善と、洪水対策を目的に計画されました。この工事により、地元の方々の利便性が高まることはもちろん、地域産業の発展に寄与することは多大なものがあると考えます。

大分県教育委員会では、これらの工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を平成4年度から平成5年度にかけて実施しましたが、横手遺跡群では縄文時代の集落跡、中世の石垣・製鉄遺構など注目すべき遺跡がみられ、その調査の成果を広く活用していただくためここに発掘調査報告書を刊行するはこびになりました。本報告書が、横手遺跡群の研究及び埋蔵文化財に対する理解に役立つよう願ってやみません。

最後に、発掘調査のご指導をいただきました諸先生方をはじめ、調査にご協力いただきました関係各位、地元の方々に対し、心から感謝と御礼を申し上げます。

平成8年3月

大分県教育委員会

教育長 田 中 恒 治

例 言

- 1 本書は、大分県東国東郡国東町所在の横手遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、大分県教育委員会が県道豊後高田・国東線の工事と横手川の河川工事に伴う試験調査を行い関係部局との協議の結果実施した。
- 3 発掘調査の調査員は玉永光洋（文化課埋蔵文化財2係主査・1992年9月担当）・後藤幹彦（1992年10月・文化課埋蔵文化財第1係嘱託）、綿貫俊一（文化課埋蔵文化財第2係主任・1992年11月～1993年7月）、調査作業員 岡 つづみ、大谷つたえ、吉武しま子、森重蓮子、岡 三千子、猪俣ミトミ、岡 敬子、岡 光子、岡 きよみ、岡 七代、朝山喜代美、朝山咲子、高木和子、永松芳子、本多華世、一丸 茂、一丸勝己、一丸キヌ子、吉武昌子、萱島ヒサエ、森川マサエである。
- 4 発掘調査にあたり、国東町教育委員会、大分県東国東地方振興局の協力を得た。
- 5 遺構の実測・撮影は玉永光洋・綿貫俊一・後藤幹彦（以上県文化課）、荻 幸二（北九州市立大学学生）、稲村秀介・上田由香・池田朋生・阿南 亨・橋本幸治・浜田教靖（以上別府大学学生）が行った。
- 6 遺物の実測・トレースは、土器（縄文）が綿貫俊一、石器が浜田千春、中世の土器・陶磁器が阿部みゆき（以上文化課）が行った。遺構のトレース及び挿図の製作は綿貫の他、麻生広美（文化課）が行った。鉄滓関係の整理・挿図の製作は刈矢幸が行った。遺物の水洗・注記・復原は今村信子・坂本洋子（以上文化課）が行った。鉄滓関係資料の分析をTACと大沢正巳氏（たたら研究会）に依頼した。この他、埋納深鉢（第51図189）の実測図は坂本嘉弘が作図した。校正は執筆者の他、井口あけみが行った。
- 7 本書の執筆は第1章～第4章3と第5章付篇1を綿貫俊一が行い、第4章4を玉永光洋が行った。この他、刈矢幸が第4章5の鉄滓関係資料集の作成を行い、付篇2を山田尚志（文化課）・付篇3を大沢正巳氏（たたら研究会）が執筆した。
- 8 整理・執筆・編集に際しては下記の方々より御指導をいただいた。記してお礼申し上げます。
高橋徹・坂本嘉弘・村上久和・高橋信武・宮内克己・小林昭彦・後藤一重
- 9 題字は泉福寺住職稲井令弘律師による揮毫である。
- 10 本書の編集は綿貫俊一が行った。

凡 例

- 1 挿図の縮尺は挿図中に縮尺を明示してある。
- 2 挿図中の方位は、国広遺跡・森本遺跡が発掘区画に平行する真北で、隔弓遺跡は発掘区画の軸線に平行しない磁北である。
- 3 隔弓遺跡の遺構番号のうちPitの番号は、発掘範囲全体の通し番号ではなく発掘区画（例えばE4区）ごとの通し番号である。
- 4 隔弓遺跡の西側地区には「H-4、J-3」というような区画名がいくつかある。こうした区画名の横線は「ハイフォン」ではなく、-（マイナス記号）である。

本文目次

序文	
例言	
第1章 横手遺跡群の発掘調査	1
1. 発掘調査の経過	1
2. 位置と環境	1
第2章 国広遺跡	4
1. 遺跡の概要	4
2. 縄文時代の遺物	5
3. 奈良・平安時代の遺構・遺物	12
第3章 森本遺跡	17
1. 遺跡の概要	17
2. 縄文時代後期の遺物	19
3. 弥生時代早期の遺構と遺物	45
第4章 陽弓遺跡	63
1. 遺跡の概要	63
2. 縄文時代早期の遺物	64
3. 縄文時代後期・晩期・弥生時代早期の遺物	71
4. 古代・中世・近世の遺構と遺物	80
第5章 まとめ	155
1. はじめに	155
2. 縄文時代早期	155
3. 縄文時代後期	157
4. 弥生時代早期	157
5. 歴史時代	158
付 篇	
1. 泉福寺開山堂の鉄製香爐台	163
2. 国東郷横手谷の開発史と歴史地理	165
3. 陽弓遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査	171

挿 図 目 次

第1図 横手遺跡群の位置と史蹟分布	2	第9図 国広遺跡 3～5区の奈良時代遺構	12
第2図 県道豊後高田・国東線と2級河川横手川の 改修城内遺跡群の位置図	3	第10図 森本遺跡の発掘区画図	17
第3図 国広遺跡の発掘区画図	4	第11図 森本遺跡遺物分布図	18・19
第4図 縄文時代早期の遺物分布図	6・7	第12図 縄文時代後期-第2集中部の遺物(土器)	22
第5図 縄文時代早期の遺物(土器)	8	第13図 縄文時代後期-第2集中部の遺物(土器)	23
第6図 縄文時代早期の遺物(土器)と 歴史時代の土器	9	第14図 縄文時代後期-第2集中部の遺物(土器)	24
第7図 国広遺跡の遺物(石器類)	11	第15図 縄文時代後期-第2集中部の遺物(土器)	25
第8図 国広遺跡の遺物(石器類)	11	第16図 縄文時代後期-第2集中部の遺物(土器)	26
		第17図 縄文時代後期-第2集中部の遺物(土器)	27
		第18図 縄文時代後期-第2集中部の遺物(土器)	28

第19図	縄文時代後期-第2集中部の遺物(土器)…29	第50図	縄文時代晩期埋壙の位置……………78
第20図	縄文時代後期-第2集中部の遺物(土器)…30	第51図	縄文時代後・晩期と弥生時代早期の遺物 (土器)…79
第21図	縄文時代後期 -第2集中部外の遺物(土器)…31	第52図	陽弓遺跡遺構分布図……………80・81
第22図	縄文時代後期-第2集中部の遺物(土器)…32	第53図	中世遺構(東地区)分布図……………84
第23図	縄文時代後期 -第2集中部外の遺物(土器)…33	第54図	製鉄関係遺構(F3区)実測図……………85
第24図	縄文時代後期 -第2集中部外の遺物(土器)…34	第55図	調査区東地区出土の遺物分布……………86
第25図	縄文時代後期 -第2集中部外の遺物(土器)…35	第56図	石組み遺構実測図……………86
第26図	縄文時代後期 -第2集中部外の遺物(土器)…36	第57図	流路状遺構(旧河道)実測図 (G-1・G0・F-1・F0)…87
第27図	縄文時代後期・弥生時代早期ほか -第2集中部外・東区(土器)…37	第58図	北西地区の中世遺構分布図……………88
第28図	縄文時代後期 -第2集中部と集中部外の遺物(石器)…43	第59図	北西地区の主要遺構実測図……………89
第29図	縄文時代後期 -第2集中部と集中部外の遺物(石器)…44	第60図	J-2区・I-2区の大形土坑・ I-2区石垣遺構実測図…90
第30図	弥生時代早期-第1集中部内土坑……………45	第61図	調査区西地区の遺物分布状態……………91
第31図	弥生時代早期-第1集中部の遺物(土器)…47	第62図	K-2・J-2・I-2・H-2区南北トレンチ 東側土層断面図…92
第32図	弥生時代早期-第1集中部の遺物(土器)…48	第63図	石帯実測図……………92
第33図	弥生時代早期-第1集中部の遺物(土器)…49	第64図	出土遺物実測図1(土師器小皿)……………103
第34図	弥生時代早期-第1集中部の遺物(土器)…50	第65図	出土遺物実測図2(土師器小皿)……………104
第35図	弥生時代早期-第1集中部の遺物(土器)…51	第66図	出土遺物実測図3(土師器坏)……………105
第36図	弥生時代早期-第1集中部の遺物(石器)…54	第67図	出土遺物実測図4(土師器坏・土師器塊)…106
第37図	弥生時代早期-第1集中部の遺物(石器)…55	第68図	出土遺物実測図5(瓦器塊)……………107
第38図	弥生時代早期-第1集中部の遺物(石器)…55	第69図	出土遺物実測図6(須恵系系鉢・瓦質鉢・釜)…108
第39図	陽弓遺跡の発掘区画図……………63	第70図	出土遺物実測図7(土鍋・土鍋・土釜)……………109
第40図	陽弓遺跡の縄文時代早期遺物の分布図……………65	第71図	出土遺物実測図8(土鍋)……………110
第41図	縄文時代早期の遺物(土器)……………66	第72図	出土遺物実測図9(すり鉢)……………111
第42図	縄文時代早期の遺物(土器)……………67	第73図	出土遺物実測図10(すり鉢・火鉢)……………112
第43図	縄文時代早期の遺物(土器)……………68	第74図	出土遺物実測図11(壺・壺)……………113
第44図	縄文時代早期の遺物(石器)……………70	第75図	出土遺物実測図12(火鉢・甕・壺・天目埴・ 皿・焜炉・鉢・急須・灯火具・土人形)…114
第45図	縄文時代後期・弥生時代早期の遺物 (石器)…72	第76図	出土遺物実測図13(白磁碗・皿)……………115
第46図	縄文時代後期・弥生時代早期の遺物 (石器)…73	第77図	出土遺物実測図14(白磁合子・青磁碗・皿)…116
第47図	縄文時代後期・弥生時代早期の遺物 (石器)…74	第78図	出土遺物実測図15(青磁碗・皿・白磁香炉・ 白磁皿・染付碗・青磁瓶)…117
第48図	縄文時代後期・弥生時代早期の遺物 (石器)…75	第79図	出土遺物実測図16 (染付碗・皿・小瓶・青磁鉢・陶器小塊)…118
第49図	縄文時代後期・弥生時代早期の遺物 (石器)…76	第80図	土鏡実測図……………119
		第81図	銅鏡・刀装具(小柄)実測図……………119
		第82図	製塩土器実測図……………119
		第83図	フイゴ(1・2)・溶解炉破片(3)……………126
		第84図	製錬滓の分布……………127
		第85図	精錬銀渣滓の分布……………127
		第86図	鍛冶系ガラス質滓の分布……………128

第87図	鍛冶滓の分布	128
第88図	炉内滓の分布	129
第89図	炉壁溶融物の分布	129
第90図	溶解炉・炉底滓の分布	130
第91図	溶解炉滓の分布	130
第92図	鉄塊系遺物の分布(Fe ⁺)角a ※F2 鍛冶系5個154.3g含む	131
第93図	鉄塊系遺物の分布(Fe ⁺)⑩+⑪	131
第94図	鉄塊系遺物の分布(Fe ⁺)⑩	132
第95図	鉄塊系遺物の分布(Fe ⁻)	132
第96図	羽口破片の分布	133
第97図	陽弓遺跡鉄滓実測図(1)	134
第98図	陽弓遺跡鉄滓実測図(2)	135

第99図	陽弓遺跡鉄滓実測図(3)	136
別添図	横手谷と近隣の地名・横手谷の灌漑系図	
付篇1		
第1図	泉福寺開山堂の鉄製香爐台実測図	164
付篇3		
Fig. 1	製錬滓(YKU-1)のX線回折プロフィール	187
Fig. 2	椀形鍛冶滓(YKU-4)の X線回折プロフィール	187
Fig. 3	椀形鍛冶滓(YKU-20)の X線回折プロフィール	188
Fig. 4	溶解炉滓(YKU 27)の X線回折プロフィール	188

表 目 次

第1表	国広遺跡の土器観察表	10
第2表	石器・石材組成表	10
第3表	国広遺跡の石器観察表	12
第4表	森本遺跡の土器観察表	38~41
第5表	森本遺跡の石器観察表	42
第6表	石器・石材組成表	42
第7表	弥生時代早期の土器観察表	52
第8表	石器・石材組成表	53
第9表	弥生時代早期 - 第1集中部とその周辺の石器観察表	56
第10表	縄文時代早期の土器観察表	69
第11表	縄文時代早期の石器・石材組成表	69
第12表	縄文時代早期の石器観察表	70
第13表	縄文時代後期の石器・石材組成表	71

第14表	縄文時代後期・弥生時代早期の 石器類観察表	77・78
第15表	古代・中世・近世の遺物観察表	120~124
第16表	鉄滓類の地区別の重量及び組成	137~140
付篇2		
Table. 1	分析資料一覧表(陽弓遺跡)	184
Table. 2	供試材の化学組成	184
Table. 3	鉄塊系遺物(YKU-7)の表皮スラグの コンピュータープログラムによる 高速度定性分析結果	185
Table. 4	鉄塊系遺物(YKU-12)の鉄中非金属 介入物のコンピュータープログラムに よる高速度定性分析結果	185
Table. 5	精錬鍛冶滓(YKU-20)のコンピューター プログラムによる高速度定性分析結果	186

写真図版目次

図版1	1. 国広遺跡近景(西→東)	13
	2. 国広遺跡近景(東→西)	13
図版2	3. 縄文時代早期の遺物出土状態	14
	4. 縄文時代早期の遺物出土状態	14
	5. 奈良時代の溝(東→西)	14

図版3	6. 国広遺跡の川原田II式土器外面	15
	7. 国広遺跡の川原田II式土器内面	15
図版4	8. 国広遺跡の石核	16
図版5	9. 森本遺跡遠景	57
	10. 森本遺跡近景	57

図版 6	11. 第2集中部出土状態(縄文時代後期) ……58
	12. 第1集中部出土状態(弥生時代早期) ……58
	13. 第1集中部土坑(弥生時代早期) ……58
図版 7	14. 第2集中部の鉢形土器 ……59
	15. 第2集中部の浅鉢形土器 ……59
	16. 第2集中部の浅鉢形・鉢形土器 ……59
	17. 第2集中部の浅鉢形土器 ……59
図版 8	18. 第2集中部の各種土器 ……60
	19. 第2集中部の石器類 ……60
	20. 第2集中部の石器類 ……60
	21. 第1集中部の石器類 ……60
	22. 第1集中部の装身具未製品・石斧 ……60
図版 9	23. 第1集中部の甕形土器 ……61
	24. 第1集中部の甕形土器 ……61
	25. 第1集中部の甕形・浅鉢形・甕形土器 ……61
図版 10	26. 第1集中部の甕形土器 ……62
	27. 第1集中部の甕形土器 ……62
	28. 第1集中部の甕形土器 ……62
図版 11	29. 陽弓遺跡全景(南から北方を見る) ……141
図版 12	30. 陽弓遺跡東半部全景 (西から東方を見る) ……142
図版 13	31. 陽弓遺跡と横手谷の景観 ……143
	32. 陽弓遺跡の製鉄関連遺構 ……143
図版 14	33. 陽弓遺跡縄文時代早期の遺物分布状態 (東から西) ……144
	34. 陽弓遺跡縄文時代早期の遺物分布状態 (西から東) ……144
図版 15	35. 縄文時代晩期埋納深鉢 ……145
	36. 中世石垣遺構全景 ……145
	37. 中世石垣遺構全景 ……145
図版 16	38. 中世石垣遺構近景 ……146
	39. 中世大形土坑と石垣遺構背後の礫帯 ……146
	40. 中世石垣遺構背後の礫帯 ……146
図版 17	41. 縄文時代早期の無文深鉢形土器口縁部 ……147
	42. 縄文時代早期の無文深鉢形土器底部 ……147
	43. 縄文時代早期の石核 ……147
図版 18	44. 縄文時代晩期の埋納深鉢 ……148
	45. 縄文時代後・晩期・弥生時代早期の石器 ……148
	46. 石帯 ……148
図版 19	47. 坏・小皿類 ……149
	48. 坏・小皿類 ……149
	49. 坏・小皿類 ……149
	50. 坏・小皿類 ……149

	51. 坏・小皿類 ……149
	52. 坏・小皿類 ……149
	53. 土鍋類 ……149
図版 20	54. 瓦質すり鉢 ……150
	55. 土鍋 ……150
	56. 土釜 ……150
図版 21	57. 白磁類の口縁部 ……151
	58. 白磁類の底部 ……151
図版 22	59. 青磁類(外面) ……152
	60. 青磁類(内面) ……152
	61. 青磁類(底部外面) ……152
図版 23	62. 近世石組み(トイレ)遺構(西から東) ……153
	63. 近世石組み(トイレ)遺構(東壁) ……153
	64. 近世染付磁器碗 ……153
図版 24	65. 近世染付磁器皿 ……154
	66. 陽弓遺跡東端部付近 (左上方石組・トイレ遺構) ……154

付 録 3

Photo. 1	鉄滓の顕微鏡組織 ……189
Photo. 2	含鉄鉄滓の顕微鏡組織 ……190
Photo. 3	鉄滓と黒鉛化木炭の顕微鏡組織 ……191
Photo. 4	鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……192
Photo. 5	鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……193
Photo. 6	鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……194
Photo. 7	鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……195
Photo. 8	鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……196
Photo. 9	鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……197
Photo. 10	鉄塊系遺物と含鉄鉄滓の顕微鏡組織 ……198
Photo. 11	鉄滓の顕微鏡組織 ……199
Photo. 12	滴下滓、羽口先端溶融物の顕微鏡組織 ……200
Photo. 13	溶解炉関連遺物の顕微鏡組織 ……201
Photo. 14	粒状滓の顕微鏡組織 ……202
Photo. 15	粒状滓の顕微鏡組織 ……203
Photo. 16	粒状滓の顕微鏡組織 ……204
Photo. 17	鍛造切片の顕微鏡組織 ……205
Photo. 18	実体顕微鏡組織とマクロ組織 ……206
Photo. 19	鉄塊系遺物(YKU-7)の表皮スラグの 特性X線像(×1,500)縮少0.66…207
Photo. 20	鉄塊系遺物(YKU-12)の鉄中非金属 介在物の特性X線像と定量分析値 (×2,400)縮少0.65…208
Photo. 21	挽形鍛冶滓(YKU-20)の特性X線像 (×1,500)縮少0.7…209

第1章 横手遺跡群の発掘調査

1. 発掘調査の経過

大分県では、1992年度東国東郡国東町の横手地区で県道豊後高田・国東線のバイパス建設と横手川の河川改修を計画した。計画対象地は、横手川沿いの緩やかな河岸段丘が広がっており、地形からみると埋蔵文化財の包含が予想された。したがって試掘調査を実施する必要が生じ、1992年にこれを行った。その調査方法は、重機で表土を除去した後、作業員が精査する方法で観察した。その結果、工事計画地内の字陽弓・字森本・字国広と呼ばれる場所で埋蔵文化財の発見があった。

大分県教育委員会は、試掘調査結果をもとに取りあつかいを協議したが、陽弓遺跡・森本遺跡・国広遺跡については、工法変更等による遺跡の現状保存は不可能となった。この為、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、1992年9月～1993年7月に行った。発掘作業は、陽弓遺跡の西半分を1992年に行い、1993年に森本遺跡・国広遺跡・陽弓遺跡の東半分で行った。発掘調査の結果、陽弓遺跡では中世の遺構・遺物、森本遺跡では縄文時代後期末・弥生時代早期の遺構・遺物、国広遺跡では縄文時代早期前半・平安時代の遺構・遺物が見つかった。

なお上記の発掘調査は、大分県東国東地方振興局の依頼をうけ、大分県教育委員会が主体となり行った。発掘作業は1993年7月30日に終了した。

2. 位置と環境

立地環境：国東半島は、九州の東北部から瀬戸内海に向けて突き出た半島で、東西約30km、南北約40kmである。半島の中央には休火山である両子山(標高721M)がそびえ、この山を中心に細長い放射状の尾根や谷が八方に延びている。国東半島の位置は瀬戸内海に突出しているだけでなく、本州、四国に面する海上交通の要衝にあたり、北方に周防灘、東方に伊予灘、南方に別府湾を臨む。海岸線は変化に富んでおり、北部では多くの入江をもつリアス式海岸が発達し、南東部では砂丘・段丘が発達している。

河川は、半島と山体の規模に比例した小規模河川で、放射状の谷底を流れる。こうした河川は半島東部の国東町も同様であり、北から来浦川、堅来川、富来川、田深川、横手川、赤松川、清流川、治郎丸川、重綱川等の河川が東流し、谷あいには河岸段丘、河口付近に沖積平野が形成されている。横手遺跡群の国広遺跡・森本遺跡・陽弓遺跡は横手川上流の左岸にある河岸段丘上に立地している。なお、それぞれの遺跡は東国東郡国東町大字横手字国広・字森本・字陽弓に所在する。

歴史環境：本遺跡群が立地する谷あいの往來をさかのぼると両子山に至り、ここから豊後高田の都甲谷に下るルートがある。国東半島には宇佐八幡宮と深い関係が想定される六郷満山が奈良時代に開かれている。この六郷満山と呼ばれる霊場は、後に修験道・台密の仏教が発達しており、各所でその痕跡が残っている。遺跡群のある地域も例外ではなく、「行入・ハライ」といった地名も残っている。とりわけ行入には六郷山寺院末山の行入寺(本尊・不動明王)がある。

遺跡の存在する横手地区は、奈良時代以来郡衙のあった国東郷(郡司・国埜臣〜紀氏)に所属するが、領家に松殿二位中将が確認できることから同半不輪領であった。親応2(1351)年1月29日付けの書状で、田原貞広は足利尊氏から国東郷を賜い、田原荘から国東に入部する。こうした状況の中、田原氏能は永和元(1375)年、陽弓遺跡の北方に曹洞宗泉福寺を建立する。1351年に田原氏が入部してから、16世紀後半に至るまで同氏の支配が続くことになる。

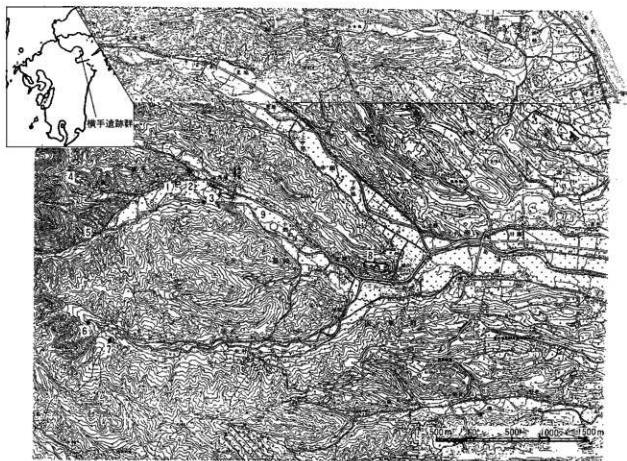
さて国東半島は、鉄の原料となる砂鉄が産出される地域である。また国東半島には鉄生産に関係する地名や鉄

滓が多数残されており、これを裏づけるように鍛冶工人が多数存在したことが『小倉藩入部改帳』により判る。これらの事柄は、横手遺跡群周辺も例外ではなく、カジヤ迫・カジヤ・金原などの地名や鉄滓が残されている。こうした事実は、寛応2年に入部した田原氏にとっての重要な経済基盤の一つになったことが予想される。

大友氏が失脚した後、様々な武士が国東地方を支配するが、慶長4（1599）年、丹後田辺の城主たる細川忠興（12万石）が、速見・国東地方を加増されたことで一旦落ちつく。この細川忠興によって泉禰寺が再建される。細川氏は熊本へ転封となり、変って小笠原氏が杵築藩主として入部し、更に正保2（1645）年野見松平氏が入部し、幕末まで続くことになる。江戸時代の国東地方は農業開発が藩経済充実のために重要視されたようで、さかんに溜池構築・新田開発が行われている。杵築を中心に270の溜池があるらしく、国東町内にも大きなもので135を数える。横手地区にも、平六池・小迫池・駄返池・狐谷池・山口池・鍛冶迫池などが谷あい分布する。

これまで平安～近世の横手谷を周辺地域の事情をまじえながら説明してきた。一方周辺地域で発掘・発見された遺跡・遺物にも重要な例が多い。縄文時代早期の土器が層位的に出土した成仏岩陰、縄文時代前期に属する羽田遺跡は姫島産黒曜石の供給拠点と目される遺跡でもある。また古墳時代の前方後円墳も国東地方では最も集中するのが国東町であり、後に豊後国正税課に「額外正八位下敷九等国前臣竜廣」と記されたり、郡衙が設置されていることも地方政治の中核地区であることを示している。これにかかわるように桜本宮境内から国東半島最古とみられる古瓦が見つかっている。瓦は奈良時代にさかのぼるとみられる法隆寺系と鴻臚館系の例である。おそらく宇佐宮弥勒寺の系統を引く桜本宮神宮寺に由来する瓦であろう。この他、富来地区の浜崎寺山遺跡・長野地区の安近遺跡・旭地区の由井ヶ迫遺跡などで、古代～中世にかけての鉄製産に関する遺構・遺物が出土している。

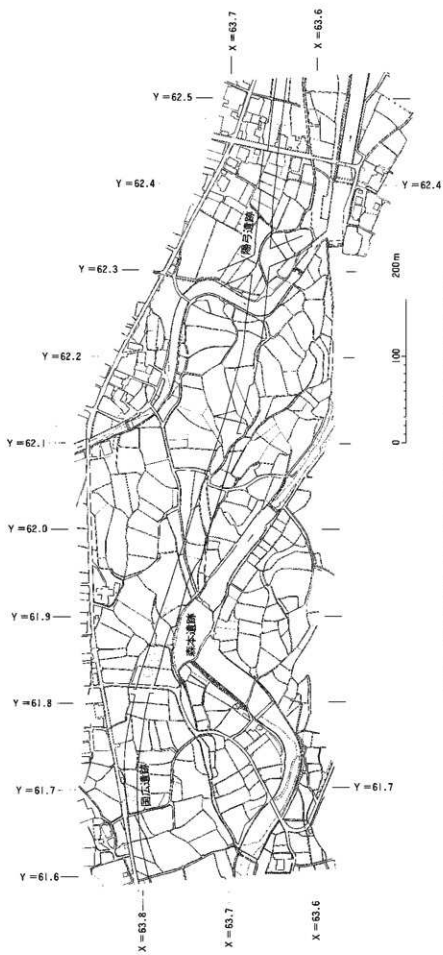
（綿貫）



第1図 横手遺跡群の位置と史蹟分布

1. 国広遺跡、2. 藤本遺跡、3. 隅弓遺跡、4. 神宮寺、5. 行入寺、6. 宇土仏跡、7. 左荘板碑、8. 亀城跡、9. ヘンサイ寺跡

※ 1.～3. が横手遺跡群



第2図 県道豊後高田・国東線と2線河川橋手川の改修域内道路群の位置図

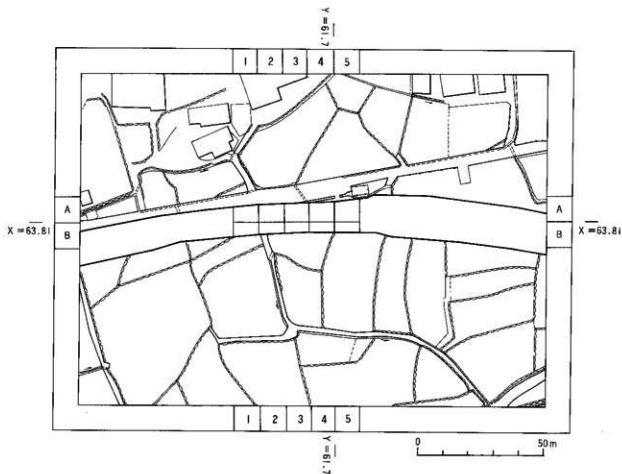
第2章 国広遺跡

1. 遺跡の概要

国広遺跡は横手遺跡群の中では最も西よりで、山際に近い河岸段丘上に立地する。北側の山麓に近いある馬場という集落とは、県道をはさんで対面する位置にある。遺跡の標高は80m前後で、発掘面積は約233m²である。試掘調査の所見では、平安時代の溝と縄文時代の遺物が見つかった。遺跡周辺部（道路予定地外）は既に圃場整備が進んだ水田が広がっており、踏査したところ縄文時代の石器や中世の遺物が多量に採集されている。

発掘は1993年の1月に行った。まずバック・フォーを用いて表土を掘り下げた（第3図）。表土は約80cm～約40cmの厚さがあり、発掘区の西半分が厚く、東へ行くほど薄くなる。表土を削ぐと茶褐色で粘質の層が現われ、若干土器が見つかった。この層は東へ行くほど薄くなる。特に発掘区の中程から東端までの間は茶褐色土が極めて薄い。茶褐色土から出てくる遺物は、大半が縄文時代早期前半の土器で、これに次いで同期と思われる石器類が若干見ついている。遺物分布の密度は、茶褐色土の厚いところで多く、薄いところで少量となる。また北側の県道沿い約3m幅は基盤礫層が露出しており、遺物はほとんど分布しない。つまり、東へ向かうほど遺物は少なくなること、県道よりの部分には遺物がほとんどない分布状況を示している。

発掘区の東半分は、茶褐色土が薄いか、または基盤礫層が露出している部分であるが、これらの層に掘り込まれた遺構が若干ある。発掘区の東端付近は削られ残っていないが、発掘区の南側の水田方向へ延びる状況である。遺構内からは須恵器が出土している。



第3図 国広遺跡の発掘区画図

2. 縄文時代の遺物

(1) 土器 土器には、紋様施文の違いや有無、器形の違いから大別して三つに区分できる。

つまり、無文尖底深鉢形土器が約470点、押型文尖底深鉢形土器が16点、貝殻丘底平底深鉢形土器(寨ノ神式土器)が1点の三者である。これら三つの大別土器群は、紋様・器形はもとよりその焼成・胎土においても大きく相違している。そこで、その分布を区別して提示した(第4図)。

遺跡出土の土器の中で最も多量に出ているのが無文尖底深鉢形土器であるが、その分布は、前述したように帯状に分布する。これは土器を包含する層の厚・薄にも関係しているが、発掘区の西半分が集中性が高い。

一方、押型文を主紋様とする土器は、量もすくなくかなり散在的な分布をとっている。しかしその分布は無文尖底深鉢形土器のとおおむね一致している。

三つめの貝殻丘底平底深鉢形土器は、発掘区の東端に1点だけ見つかった。

次に、遺跡で見つかった土器の特徴について記述する。

無文尖底深鉢形土器・第1類：底部形態は尖底であろうが、詳らかでない。器形は胴部上半でやや内傾気味に弧状を呈しつつ立ち上がらせる。その際、端部を外方に向ける(第5図1・2)。

無文尖底深鉢形土器・第2類：底部形態は尖底であろうが、詳らかでない。器形は胴部上半で内傾させた後、口縁端部を上方向けて丸く収める(第5図4・7・9)。

無文尖底深鉢形土器・第3類：底部形態は尖底であろうが、詳らかでない。器形は胴部上半を内傾させる。内面側の口縁端部を切り落したような傾斜形にする。端部が尖頭形になる例と(第5図5・12)、ゆるく丸味をもった場合とがある(第5図6・8・10・第6図14)。

無文尖底深鉢形土器・第4類：これは明確な器形復原はできないが、胴部上半で内傾させ、口縁部を短く外反させた例(第5図5)。

無文尖底深鉢形土器・第5類：尖底部から立ち上り、ゆるやかに外方に開く例である。端部はそのまま丸く修まる(第5図11・13)。

調整：土器の内・外面の調整は、指(手)を使ったナデと丘痕、貝殻によるナデがある。無文尖底深鉢形土器1類に貝殻による縦方向の条痕調整が表面に認められる。これ以外はおおむね指を使ったナデと丘痕である。

その他：無文尖底深鉢形に観察される特徴としては、厚さが1cm前後を中心とする場合が全てである。第5図8は、無文尖底深鉢形土器・第3類のうち端部がゆるく丸味をもつ土器をベースに、幅広い粘土粒を土器の口縁上端外面へ帯状に貼り付ける。これと同様の土器をベースに、口縁端部の内面に刻目を施す例がある(第6図14)。この標本については内面の剝落が著しく、刻目かどうかの正確なことは判らない。

押型文尖底深鉢形土器：この土器は総数16点が見つかり、このうち図示に堪える15点を掲載した。いずれも胴部破片であることから、器形の特徴がそのまま理解できる例はない。しかし、国東町成仏岩陰遺跡や大分県内で見つかった断片的な類例から推し測ると、尖底部から外反・内反することなく口縁部へと立ち上る例のようである。

文様には山形と粒状の押型文があり、いずれも口縁部と並行するかたちで帯状に施す点に最大の特徴がある。施す手法は細い棒に楕円形や山形のくぼみを希望する幅で棒の主軸に直交するように刻む。これを「原体」と呼んでいる。この原体を製作塗上の土器の表面に押し当て、横方向に回転させるわけであるが、本遺跡の土器に観察される文様は施文しているところとしてないところを交互に行っている。したがって原体の長さが判りやすい。原体の長さが判る例を次にあげてみよう。第6図22が約10mm、同図25が約23mm、同図30が約30mmである。また紋様帯間の間隔は第6図25が約10mm、同図26が約13mm、同図30が約5mm、同図31が約35mmとなっている。これまでみてきたように復原される原体の長さや原体間の幅は様々であることが判った。

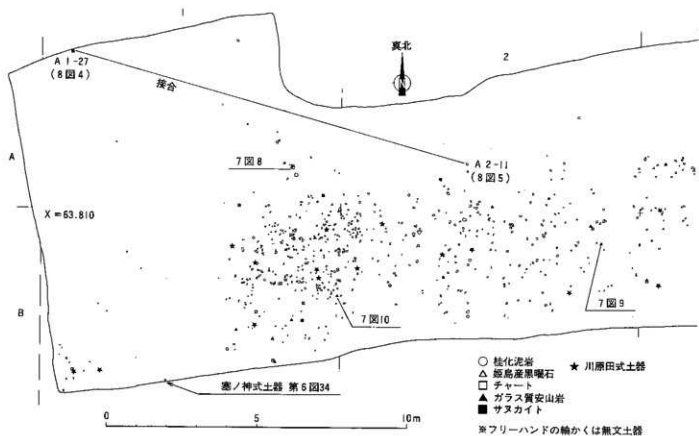
調整：調整は内・外面ともに丁寧なナデであり、第6図33のように文様を一部ナデ消したことが推測されるものさもある。このことは紋様を施した後に、文様効果をより高めるか、調整上の必要からか、再度ナデ調整を行

う場合のあったことを示している。この他、押型文尖底深鉢形土器の底部付近と考えられる例には、土器製作段階のものと推測される指頭疔痕が内・外両面に観察される（第6図15）。

その他：押型文尖底深鉢形土器の厚さは、いずれも薄い。最も厚い例で約7mm（第6図29）で、最も薄い例で約4mm（同図33）で、その他は5mm前後である。胎土は、無紋尖底深鉢形土器も押型紋尖底深鉢形土器も白色粒を含むことで共通するが、後者は粒が小さい。このことは押型文尖底深鉢形土器の素地に細かい粘土を用いていることと併せて考えると、粘土供給地・土器製作地が異なっていたことが予想される。

底部：底部は、底部付近の部位が1例（第6図15）、尖底部3例（同図16～18）がある。このうち第6図15・16は、土器の厚さが4mmと5mmであることから押型文尖底深鉢形土器の尖底部であることは疑いない。一方、第6図17・18は、土器が10mmと11mmの厚さであることから無文尖底深鉢形土器の尖底部と言える。

(2) 石器・剥片類 本遺跡内からは、第2表に示した石器・剥片類がある。石器素材の作出や石器製作の際、副次的に生産される剥片・碎片が最も多い。これに次ぐのが、加工痕のある剥片で16例ある。この石器は剥片に簡単な二次加工を加えただけで、形態や加工の程度は一定しない。狩猟具である石鏃はあまり多くなく、採集による5例を加えて9例しかない。この他、石鏃の未製品が5例ある。これら石鏃の中には、押型文土器群とともに見つかる「鉄形鏃」は含まれていない。

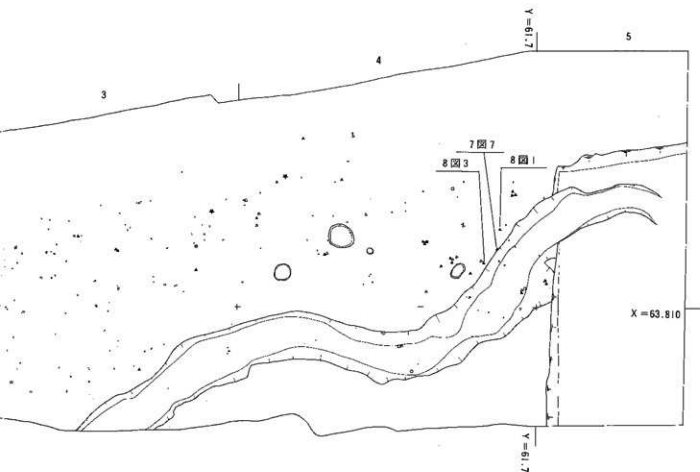


第4図 縄文時代早期の遺物分布図

剥片を生産する石核は12例ある。こうした石核の特徴は、いずれも定形的な石核形態や剝離面を有しておらず、様々な石の形状に合せて不定形の剥片を生産している。

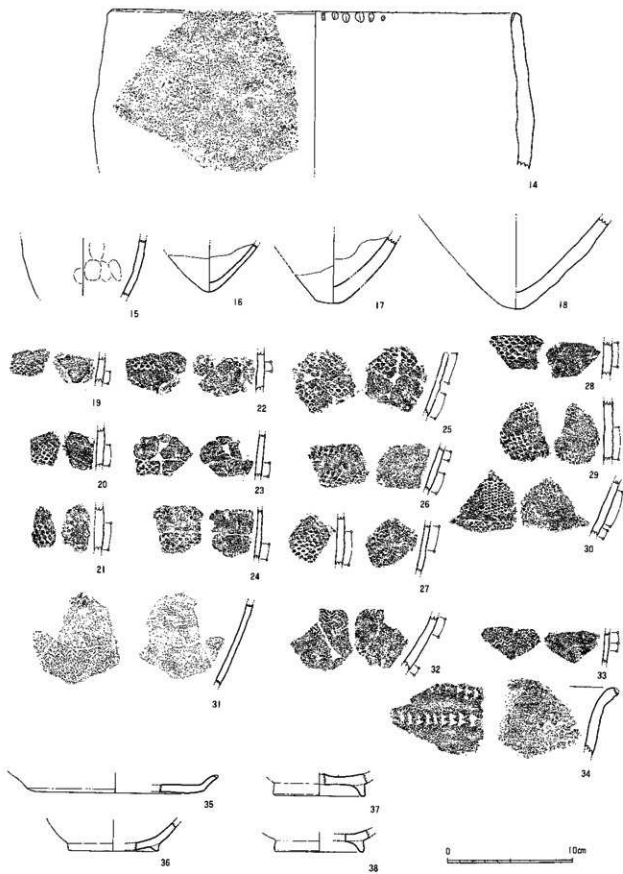
次に第2表で遺跡で用いられた石器・剥片類の石材をみてみたい。黒曜石やサヌカイト類以外は遺跡の近隣からと考えられる。用いられた石材の中で最も多いのは大分県姫島東部に分布するガラス質安山岩で、57個・565.6gの量である。遺物の種類の中でスクレイパーと石錐を除く全てにガラス質安山岩の利用が見られる。重量的にガラス質安山岩に次ぐのが多久産サヌカイトで9個・480.2gの量である。とはいうものの、その中の石核1個が456.0gというように多久産サヌカイトのほとんどを占めており、遺跡内でのひんばんな剝離製作作業を物語っているわけではない。石材の総重量が多久産サヌカイトに次ぎ多いのが姫島産黒曜石の152.4gであるが、これは遺物量から見ると最も多い65点からなる。更に9種類の石器・剥片類中、スクレイパーを除く8種類で観察される。以上の石材に次ぐのがチャートで、石錐を除く全てに観察できる。

(3) まとめ 国広遺跡から回収された遺物の大半は縄文時代早期に属する土器と石器からなる。その出土状態を見ると発掘区の西半分に限られて集中しており、しかも大きな土器破片が多い。しかも発掘区内の端に向かうほど数が減じる傾向があり、小規模ながらもまとまった分布を示す。また土器については壱ノ神式土器1点が発掘区の端部で見つかっただけで、10数点見つかった押型土器の中には型式学上とりたてて変異の大きいものはない。したがって押型土器及び数百点の無紋土器群は一括性の高い一群であることが理解される。





第5図 縄文時代早期の遺物（土器）実測図



第6図 縄文時代早期の遺物（土器）と歴史時代の土器実測図

第1表 国広遺跡の土器観察表

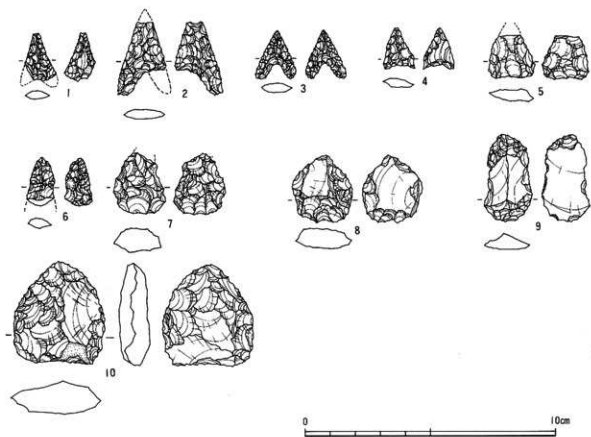
探検番号	出土区	遺物番号	器種	胎土	色		表面調整	造	量(cm)	用途	備考
					内面	外面					
5 窟1 B1	B1	36	深鉢	金雲母・白色粘多量	茶褐色	茶褐色	内面染灰, 外面ナデ・磨面ナデ	27.8	不明	不明	
5 窟2 B1	B1	9	深鉢	白色粘多量	茶褐色	褐色	内面ナデ, 外表面染灰ナデ	不明	不明	不明	
5 窟3 B1	B1	194	深鉢	白色粘多量, 金雲母・良石若干	茶褐色	茶褐色	内・外面染灰	不明	不明	不明	
5 窟4 A1	A1	30	深鉢	白色粘多量	茶褐色	茶褐色	内・外面ナデ・指痕圧痕有	不明	不明	不明	
5 窟5 B1	B1	174	深鉢	白色粘多量, 角閃石・金雲母若干	茶褐色	茶褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	
5 窟6 B1	B1	59	深鉢	小豆大の白色粘	不明	暗褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	
5 窟7 B1	B1	204	深鉢	白色粘・角閃石若干	黄灰色	茶褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	
5 窟8 B1	B1	151	深鉢	角閃石・石灰石多量	茶褐色	茶褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	
5 窟9 B1	B1	91	深鉢	白色粘多量, 金雲母・良石若干	黄灰色	不明	内・外面ナデ	不明	不明	不明	
5 窟10 B2	B2	82	深鉢	白色粘・角閃石多量	黄灰色	黄灰色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	
5 窟11 B1	B1	72	深鉢	白色粘・角閃石多量	茶褐色	茶褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	
5 窟12 B1	B1	69	深鉢	白色粘多量	黄灰色	暗灰色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	
5 窟13 B1	B1	460	深鉢	小豆大以下の白色粘多量	暗灰色	茶褐色	内・外面ナデ	31.7	不明	不明	
6 窟14 B2	B2	67	深鉢	小豆大の白色粘多量	茶褐色	暗灰色	内面不明・外面ナデ	32.7	不明	不明	口縁内部に刻み目
6 窟15 B1	B1	129	鉢	白色粘	褐色	暗灰色	内・外面磨削・底	不明	不明	不明	
6 窟16 A3	A3	21	鉢	白色粘多量	黄灰色	黄灰色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	
6 窟17 B1	B1	12	深鉢	白色粘多量	茶褐色	茶褐色	内・外面ナデ・指痕圧痕有	不明	不明	不明	
6 窟18 B2	B2	109	深鉢	太豆から小豆の粘多量, 金雲母若干	明灰色	茶褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	
6 窟19 A3	A3	78	鉢	角閃石若干	黄灰色	灰褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	外面帯状横門文
6 窟20 B1	B1	138	鉢	白色粘若干	茶褐色	茶褐色	内・外面磨ナデ	不明	不明	不明	外面帯状横門文
6 窟21 B1	B1	40	鉢	白色粘・角閃石若干	茶褐色	茶褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	外面横門山形文
6 窟22 A3	A3	4	鉢	角閃石若干	黄灰色	灰褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	外面帯状横門文
6 窟23			鉢	角閃石微量	茶褐色	暗褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	外面帯状横門文
6 窟24 B1	B1	113	鉢	白色粘・角閃石若干	茶褐色	茶褐色	内面染灰方向ナデ, 外面磨ナデ	不明	不明	不明	外面帯状横門文
6 窟25 B2	B2	127	鉢	角閃石多量	黄灰色	茶褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	内外面帯状横門文
6 窟26 B2	B2	115	鉢	角閃石若干	黄灰色	黄灰色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	外面帯状横門文
6 窟27 B1	B1	190	鉢	角閃石	黄灰色	茶褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	外面山形文
6 窟28 B1	B1	74	鉢	白色粘若干	暗褐色	暗褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	外面帯状横門文
6 窟29 B2	B2	32	鉢	白色粘・角閃石若干	褐色	茶褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	外面帯状横門文
6 窟30 B2	B2	18	鉢	白色粘	黄灰色	暗褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	外面帯状横門文
6 窟31 A3	A3	62	鉢	白色粘若干	暗灰色	暗灰色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	外面帯状山形文
6 窟32 A3	A3	10	鉢	微細な黄石, 角閃石	茶褐色	茶褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	外面横山形文
6 窟33 B1	B1	119	鉢	微細な黄石	茶褐色	茶褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	外面山形文
6 窟34 B1	B1	123	深鉢	角閃石多量	黄灰色	褐色	内・外面ナデ	不明	不明	不明	外面横山形文
6 窟35 B3	B3	43	土師皿	白色粘, 濃い茶褐色粘土	茶褐色	茶褐色	内・外面ナデ, 裏面へう切りナデ	不明	不明	不明	
6 窟36 周辺			土師皿	微細な黄石	褐色	茶褐色	内面へうミダキ, 外面ナデ	不明	不明	7.3	内黒土層
6 窟37 A4	A4	59	土師皿	微細な黄石	茶褐色	茶褐色	内・外面ナデ	不明	不明	7.1	
6 窟38 A4	A4	47	土師皿	微細な黄石	茶褐色	茶褐色	内・外面ナデ	不明	不明	7.1	

第2表 石器・石材組成表

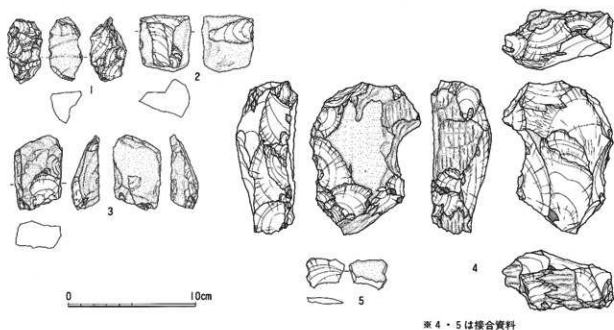
※ R-1 割片は加工痕ある割片、U-1 割片は使用痕ある割片

石材	種類	石 鏃		石 鏃	R-1 割片	U-1 割片	石 鏃 未 製 品	石 核	割 片	チップ	計
		個数	重量								
黒曜石	個数	4		1	4	3	2	2	24	25	65
(徳 島)	重量	5.3		1.5	15.4	7.7	5.6	23.7	75.1	181.1	152.4g
ガラス質	個数	2			4	2	7	7	38	2	57
安山岩	重量	3.8			30.2	6.3	21.4	352.0	150.5	1.4	565.6g
サヌカイト	個数				2			1	4	2	9
(多 久)	重量				15.4			456.0	8.0	0.8	480.2g
サヌカイト	個数				1				2	1	4
(金 山)	重量				3.5				7.2	0.9	11.6g
泥 岩	個数		1						2		3
	重量		9.2						74.5		83.7g
チャート	個数	3	1		5	2	1	1	10	3	26
	重量	2.1	1.5		26.2	4.9	4.9	12.2	20.2	4.7	76.7g
ぎよくざい	個数								1		1
	重量								17.6		17.6g
結晶片岩	個数								1		1
	重量								2.4		2.4g
計	個数	9	2	1	16	7	5	12	81	33	165
	重量	11.2	10.7	1.5	90.7	18.9	31.9	861.5	337.9	25.9	1390.2g

押型文土器は無文部をはさんで帯状に原体を横走させた尖底深鉢・尖底鉢で、川原田式Ⅱと呼称されている。川原田式Ⅱは岡東町成仏岩除・山香町川原田岩除で国広遺跡と同様な無文土器とともに見つかり、押型文土器の変遷で言えば稲荷山式以前に位置づけられている。更に、それらの遺跡では貝殻多量調整の無文土器ではなく、ナデ調整の無文土器主体の文化層の直上に川原田式土器を含む文化層が位置することで共通する。



第7図 国広遺跡の遺物実測図



※4・5は接合資料

第8図 国広遺跡の遺物実測図

第3表 国広遺跡の石器観察表

※Hob形島産黒曜石

検出番号	遺物番号・出土区	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	石材
第7区 1	国広周辺	石 鏃	1.85	1.25	0.40	0.6	チャート
# 2	1号溝	#	2.9	1.9	0.4	1.6	HG
# 3	国広周辺	#	1.9	1.6	3.5	0.6	チャート
# 4	国広周辺	#	1.6	1.2	0.45	0.4	Hob
# 5	国広周辺	#	1.7	1.9	0.45	1.4	Hob
# 6	1号溝	#	1.9	1.1	0.5	0.8	チャート
# 7	A4-53	#	2.4	2.05	0.8	3.7	HG
# 8	A1-16	石鏃未製品	2.7	2.4	0.8	4.9	チャート
# 9	B2-6	#	3.4	1.9	0.6	3.6	チャート
# 10	B1-143	#	4.0	3.6	1.2	17.2	HG
第8区 1	A4-54	石 鏃	5.0	2.7	2.6	27.4	HG
# 2	A3-54	#	4.4	4.05	2.9	51.3	HG
# 3	A4-50	#	5.8	3.75	2.2	51.7	HG
# 4	A1-27	#	11.95	8.7	4.7	456.0	サヌカイト
# 5	A2-11	刮 片	(2.5)	(4.0)	0.5	3.3	サヌカイト

3. 奈良・平安時代の遺構・遺物

奈良・平安時代の遺構・遺物は、発掘区の東半部を中心に検出された。

(1) 遺構

黄褐色砂質粘土層を掘り込んで作られた溝と考えられる。立地からみて水田耕作に關係する溝と考えられる。平面形は蛇行し、長さは現状で約22m、深さ約30cmである。内部の土は黒色である。遺物に糸切り離しの坏が出土しており、その特徴から11世紀頃の作と見られ、おおむね同様な時期に作られた溝であろう（第9図）。

(2) 遺物

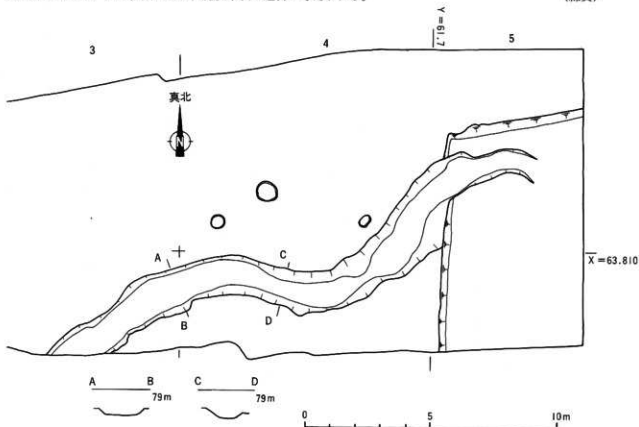
皿 茶褐色で石英の砂粒を多く含む土師質土器（第6図35）。ヘラ切り。

内黒埴A 内面が黒く、内外面が丁寧なミガキ調整されている（第6図36）。高台は尖りぎみ。

埴 茶褐色で粒子の細かい素地を用いる。高台は高く、たたみつけが平な土師質土器（第6図37・38）。

以上の土器類は、その特徴から8世紀後半頃の遺物と考えられる。

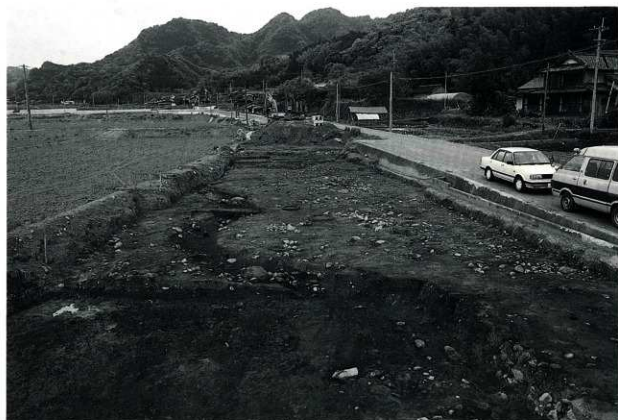
(縮寫)



第9図 国広遺跡3～5区の奈良時代遺構実測図



1. 国広遺跡近景 (西→東)

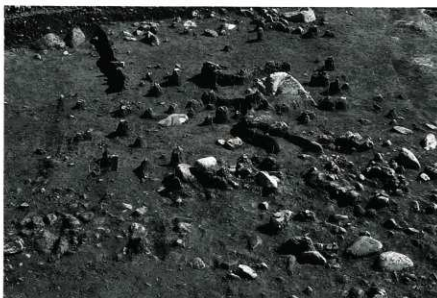


2. 国広遺跡近景 (東→西)

3. 縄文時代早期の遺物出土状態

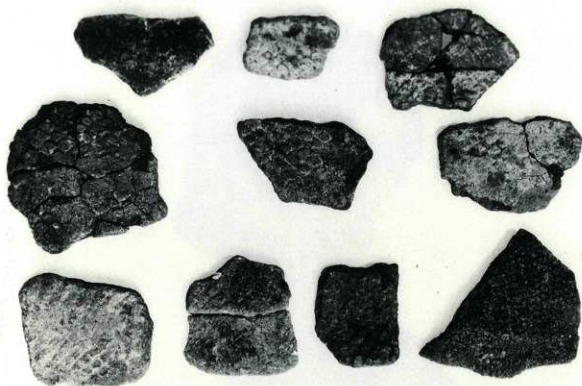


4. 縄文時代早期の遺物出土状態

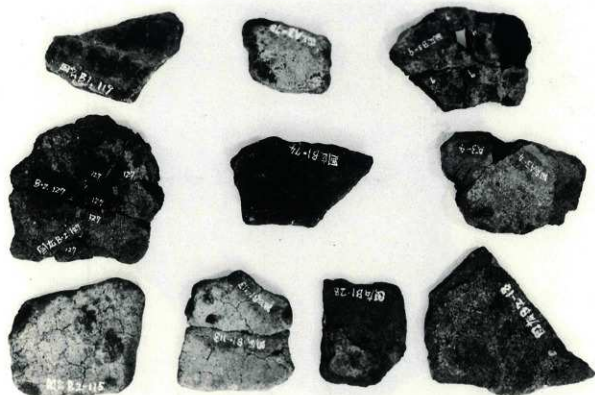


5. 奈良時代の溝（東→西）





6. 国広遺跡の川原田Ⅱ式土器外面



7. 国広遺跡の川原田Ⅱ式土器内面



ガラス質安山岩

サヌカイト

8. 国広遺跡の石核

第3章 森本遺跡

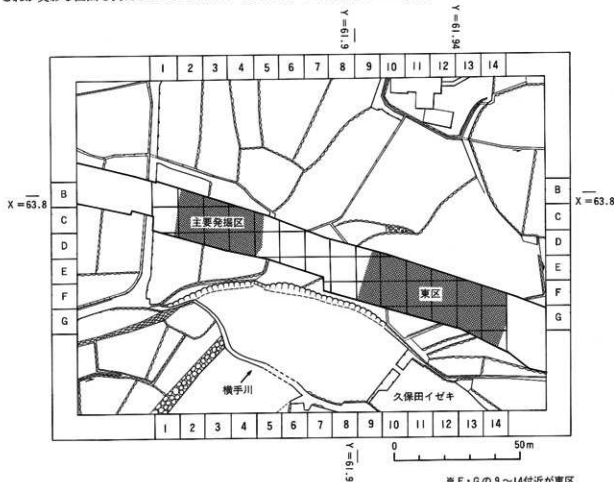
1. 遺跡の概要

森本遺跡は横手遺跡群の中では中央付近で国広遺跡と異なって山際から離れた河岸段丘に立地する。ここは河川改修前の横手川蛇行部を眼下に臨む段丘上でもある。比高差は約7メートルある。遺跡の標高は76m前後～75m前後で、発掘面積は約699.5m²である。位置は、山麓沿いにある馬瓜という集落や大蔵宮と、東流する横手川左岸との間にあたる。

試掘調査の所見では、縄文時代後期の遺物と弥生時代早期の遺物が見つかった。遺跡周辺部（道路予定地外）には既に開場整備が進んだ水田が広がっており、踏査したところ大蔵宮の東側で縄文時代早期前半の無紋土器が採取された。

発掘は1993年5月～6月に行った。まずバック・フォーを用いて表土と水田の床土を掘り下げた（第10図）。表土は約25cmの厚さがあり、この下に約5cm～10cmの水田床土がある。この下に約30cmの遺物包含層がある。遺物包含層は褐色で硬い砂質の粘土層である。水田床土と遺物包含層間にはB3区・C2区以東で黒色の自然堆積層がかん入しているが、これは水田開発以前に存在した東南方向へ傾斜する自然堆積である。

森本遺跡の主要発掘区は、南北14m、東西37mという東西方向に細長い発掘区で、面積は約500m²である。これに国土座標軸に沿うように10m方眼の区画を設定した。南北方向にA・B・C…、東西方向に1・2・3…とし、これが交わる区画を例えばB1と呼称した（第10図）。その他東区を200m²発掘した。



第10図 森本遺跡の発掘区画図

※ F・Gの9～14付近が東区

遺物の分布は、縄文時代後期後半と弥生時代早期に属する遺物がそれぞれ分布を異にして2分される状況にある(第11図)。遺物が所属する時期の観察から、北側の発掘区境界線上でB4区の中央付近と、南側の発掘区境界線上でC2区中央付近を結ぶ斜めラインを境界とすることができた。このラインは遺物の分布がやや希薄な場所でもある。更に、2分される遺物分布の中には廃棄された様な状況で特に密集する部分がある。こうした密集部分は、おおむね分布が希薄になる部分で境界を設定しており、西側に位置する集中部を「第1集中部」、東側に位置する集中部を「第2集中部」とした。これらは集中性が高い状況からみて、一括性の高いことが予想されたからである。第1集中部はB2区とB3区の境界付近に位置し、第2集中部とのラインに沿って東北方向・南西方向にも散布する。一方、第2集中部は発掘区北東隅に位置し、第1集中部に沿って、幅広く密集しながら南西方向にも分布する。第2集中部の北側と東側における遺物の分布状況は、北側が発掘区域外であったり、東側が水田境で一段下るなどの理由で詳らかにできない。

以上、遺物分布を観察してきたが、おおむね東西2群に区分されることがわかった。さて実際の遺物は、弥生時代早期に属するものと縄文時代後期後半に属するものがあった。その分布は、弥生時代早期のものが第1集中部を中心とした前記の西側分布域、縄文時代後期後半のものが第2集中部を中心とした前記の東側分布域に偏在している。

これまで記述してきたのは森本遺跡の主要発掘部分であるが、ここから東方へ40m離れた地点に我々が東地区と呼称した地区がある。この地区はF9区～F14区付近にあたり(第10図)、試掘調査段階で弥生時代早期に属する甕が見つかった。この為、東地区も本発掘調査の対象とした。表土をバック・フォーで除去した後に、遺構・遺物の検出作業を行った。ところがF12区付近に若干の遺物集中部分が観察されたものの、量は34点であった。全体的には約50点前後の遺物が見つかった。集中部分を中心として縄文時代後期の遺物の他平安時代の遺物が検出作業にもなって出土した。(縮貫)



第11図 森本遺跡遺物分布図

2. 縄文時代後期の遺物

(1) 土器

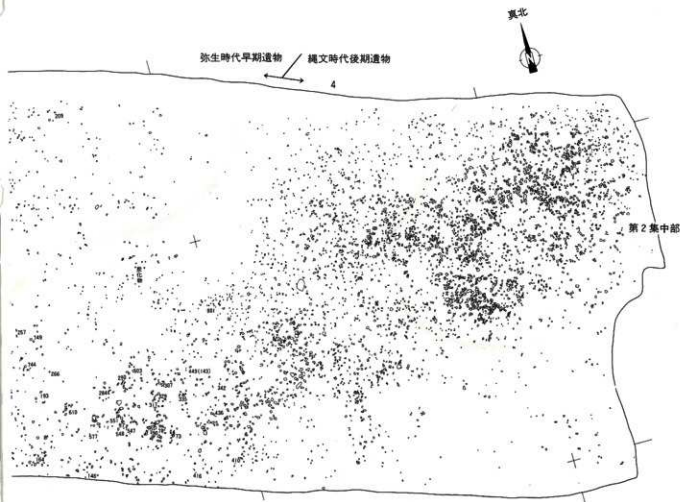
土器は夥しい量が出土しており、それらは浅鉢、鉢、深鉢、注口土器、脚付浅鉢からなる。それらは沈線文・凹線文に羽状文～細線文、凹点文を合わせ紋様帯を構成する。また表面が丁寧に磨かれており、光沢を持つものが多い。

浅鉢

浅鉢はその器形から以下のA～Cに分類される。

A₁ 口縁部が内傾～直立する例で内面から外面部の口縁部と胴部との接点が明らかな例（第12図1～6・9・11・12、第13図26、第21図126・127・129・130・132・134・139、第22図142～148）。これらは、うち口縁部が直立するのaと内傾するbに分けられる。

A₂ 胴部が下方から皿状に立ちあがり、口縁部はゆるく外半しながら外方に開く。口縁部と胴部の接点は外面側に明らかな稜を形成する。（第12図8・10）



A₃ 胴部が下方からゆるやかに立ち上り、口縁部との接点は丸味を帯び上方へ立ち上る。A₁との違いは、胴部と口縁部の境界が丸味を帯びているために稜を形づくらない。そのため両者の区分が不明確な点に最大の違いがある。(第12図7)

A₄ 胴部は下方からやや急に立ち上り、胴部と口縁部境で内湾しながら口縁部が内側に傾斜する例。丁度、球形の胴部から「くの字形」に屈折する口頸部を有する波状口縁～水平口縁深鉢の口頸部を除去した胴部に相当する。(第13図27、第21図140)

浅鉢A₁～A₂の文様はほぼ同様で、平縁の口縁部に2～3条の横走沈線・凹線(凹線の場合は約15例)を引く。これに細線文～羽状文を施す例が3例ある。(第21図128・131・133)。また巻貝の匠痕を施す例が2例ある(第21図124・125)。

B₁ 胴部がゆるく皿状に立ち上る平縁の浅鉢で、長い口縁部がわずかに外半しながら外に開き、胴部が断面「逆くの字形」に屈折する。丁度、浅鉢A₁の口縁端部にゆるく外反する口縁部をつけた形をとる(第12図14・15・17～19)。これらのうち胴部上半から口縁端部の状況がほぼ判る例を観察すると、口縁部が弓形に外反し端部を尖りぎみに細く収束させる例と(第12図18・19)、口縁部がゆるく外傾する口縁部で、端部を丸く納める例がある(第12図17)。この他、口縁端部が破損している例であっても、その断面形の特徴から前者に相当する例(第12図14・15、第21図135)と、後者に相当する例(第20図94)がある。

B₂ 胴部がゆるく皿状に立ち上る平縁の浅鉢であることはB₁と同じであるが、口縁部が短く外方にのびる例である(第12図16、第21図136、第22図149)。これらは口縁部が外反するaと(第12図16、第22図149)、直線的にのびるb(第21図136)に区分できる。

B₃ 底部から口縁部に至る基本形はB₂と同様であるが、口縁部がゆるい波状になる例である(第21図137)。

浅鉢B₁～B₃の文様はほぼ同様である。口縁部は内面の上部に横走する1条の沈線がB₂とB₃の3例に観察されるだけで(第21図136・137、第22図149)、文様を施さない例も多い。一方、胴部文様帯は胴部の肩部分(頸部)に施された横走する2～3条の凹線・沈線からなる。これに細線羽状紋を、胴部文様帯の沈線間に施す例が1例ある(第21図137)。

C₁ 明確な底部のない丸底部から、内湾しながら立ち上る塊形の浅鉢である(第13図21、第22図151)。

C₂ やや上げ底の明らかな底部を有し、斜め外方へそのまま立ち上る浅鉢である(第13図24)。この他、底部を欠く2例があり(第13図22・23)、傾きや器形が類似しているので同類と考えられる。

浅鉢C₁とC₂の文様はほとんどなく、3例中の1例が口縁部内面の上部に細い沈線を1条施す(第13図24)。

鉢

鉢はその器形から以下の二つに分類される。基本形は浅鉢や深鉢に類似する例も多い。つまり口径や器形・器高の点から、どちらともいえない一群である。

A 底部からゆるやかに立ち上り、胴部上半でわずかな丸みを持たせ、口縁部はゆるやかに開く。口縁部と胴部の境界ははっきりせず、ゆるやかに移行する(第13図25)。

B 底部からゆるやかに立ち上り、胴部上半で内湾しながら上に向かい、波状口縁部が直立気味～わずかに外傾する例(第23図177・178)である。つまり浅鉢A₄に低い波状の口縁を直立気味につけた例といえる。これにあたと見られるのが4例ある(第22図155・156、第23図179・180)。

鉢類の文様のうち鉢Aは、口縁部の内面上部に沈線を施すだけで、他に施文はない(第13図25)。鉢Bは、口縁部内面上部に沈線を施し、胴部外面上部に3条～4条の沈線を施す(第23図177・178)。またこれと同類の破片においては、波頂部から外面に縦方向の沈線を引いた後に「逆ハの字」状に細線羽状文を施す(第23図179)。

C 基本的な器形とデザインは浅鉢A₄と同じであるが、口径の大きいもの(第20図93)。

深鉢

本遺跡で見つかった土器は三万田式に属しており、その器形の中には浅鉢と浅鉢・浅鉢と鉢を重ねたような深鉢の存在することが他の遺跡の事例から予想される。その為、口縁部の小破片の場合、浅鉢なのか深鉢であるの

かえり判断にとまどう場合が多かった。したがってほぼ本来の器形が予想できる例以外は判断を保留した。

A₁ 胴部上半部で内湾しながら屈曲し、口頸部がやや外反しながら外方に立ち上がる。しかも口縁部を斜めに切り落したような端部とする例である(第23図181・182、第14図36・43、第22図158、第25図189)。

A₂ 胴部上半部で内湾しながら屈曲し、口頸部をやや外反させながら外方に立ち上がることはA₁と同様であるが、口縁端部を丸くおさめるか、コ字形におさめることに特徴がある(第14図37~42・44~47、第15図50~55、第16図56~60、第17図61~75、第18図76~85、第19図90~92、第22図157・159~164、第24図183~186、第25図187・188・190・191、第26図192~194)。これらのうち胴部と口縁部が残る例を観察すると、胴部上半部が張るa(第13図32~35、第16図57、第19図91・92、第24図184・185、第25図187、第26図195)と、口径が胴部最大幅にほぼ同様なb(第16図58、第24図186、第25図191)に区分できる。

深鉢A₁の文様は、全て口縁部の内側に横走る沈線を1条引くだけである。鉢A₂の文様は72例中6例のみが口縁部内面に沈線を施し、他は基本的に文様は施さない。

深鉢Aの調整は、おおむねナデかヘラ磨きによる場合がほとんどであるが、まれに条痕調整の場合もある。両面を条痕調整する場合と(第15図55)、外面のみに条痕調整する場合(第18図85)がある。

B 胴部の状況ははっきりしないが、他の遺跡例から、胴部上半部でゆるく内湾しながら屈曲し、外方に立ち上る。更に口縁部は逆「く」字形に内傾する水平口縁である(第19図86・88、第27図234)。

深鉢Bの文様は、現存する破片には施されていない。胴部上半部においても、大分県津野町内河野遺跡の類似から推定して施されていない可能性が高い。

深鉢Bの調整は、内・外面とも二枚貝条痕の後ミガキ(第19図86)、もう1例は内・外面ナデ(第19図88)。

C 胴部は上半部でゆるく内湾しながら屈曲し、ゆるく上外方へ外反しながら口頸部がのびる。口縁端部が外側へ斜めに切り落したような形状であり、ここを文様帯としている。口縁部の側面形は、ゆるい波状を呈している(第27図230)。

深鉢Cの文様は、口縁部文様帯に横走る沈線1条、胴部上半部の文様帯に横走る沈線2条が認められる。

深鉢Cの調整は、内面丁寧なミガキ、外面ナデである。

注口土器

本遺跡から見つかった注口土器は、その器形から推定できる胴部破片と、注口部分の破片からなる。残された胴部破片からみると、内湾する球形に近い胴部から上方に立ち上る口頸部である。一例は内傾しながら外反する口頸部と(第13図29)、内面の口頸部と胴部間に稜が入り、口頸部はほぼ上方に立ち上る例がある(第13図28)。注口部破片は、粘土に棒を刺し込むか、巻きつけるかで製作されている。なお内面に「しぼり」状のたわみが観察される。

注口土器の紋様は、横走る2条~1条の沈線間に、垂下する小沈線とともに羽状文を施す。更に口頸部の下位に見られる横走沈線に沿っても同様な羽状文がある(第13図29)。

もう1例は口頸部と胴部間に横走る1条の凹線と胴部中央部分に2条の凹線~沈線を横走させる例である。

注口土器の調整は、外面は基本的にミガキである。

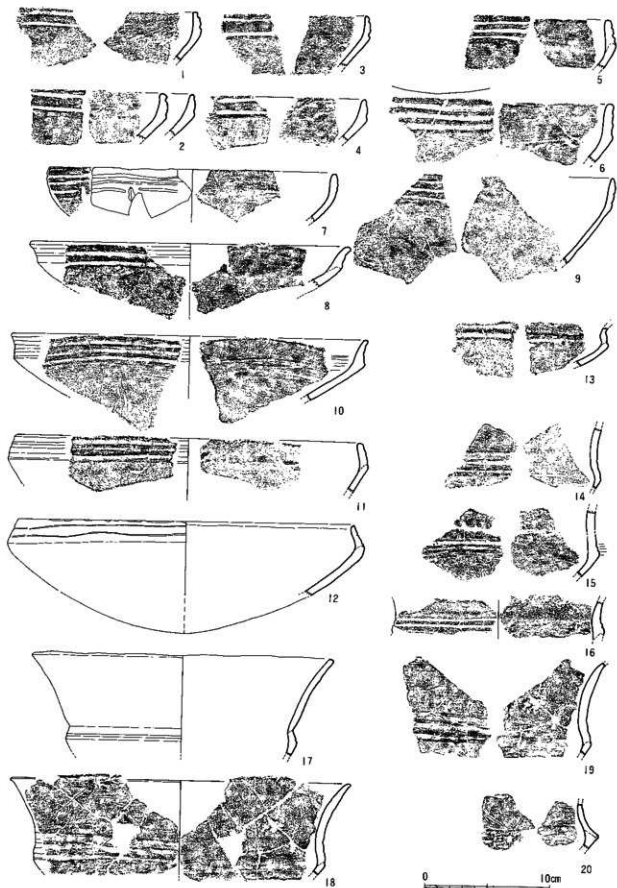
脚付浅鉢 本遺跡の脚付浅鉢は、脚部である。浅鉢部分は脚付浅鉢以外の浅鉢との区分が難しい。しかし脚部が1例しか見つからないことから考えてそのほとんどは脚付浅鉢に由来するものではないと考えられる。脚部の直径は5cmで断面が厚い(第13図30)。

紋様は脚部の下半に4条の横走沈線をめぐらし、これに2条沈線を山形にめぐらせている。

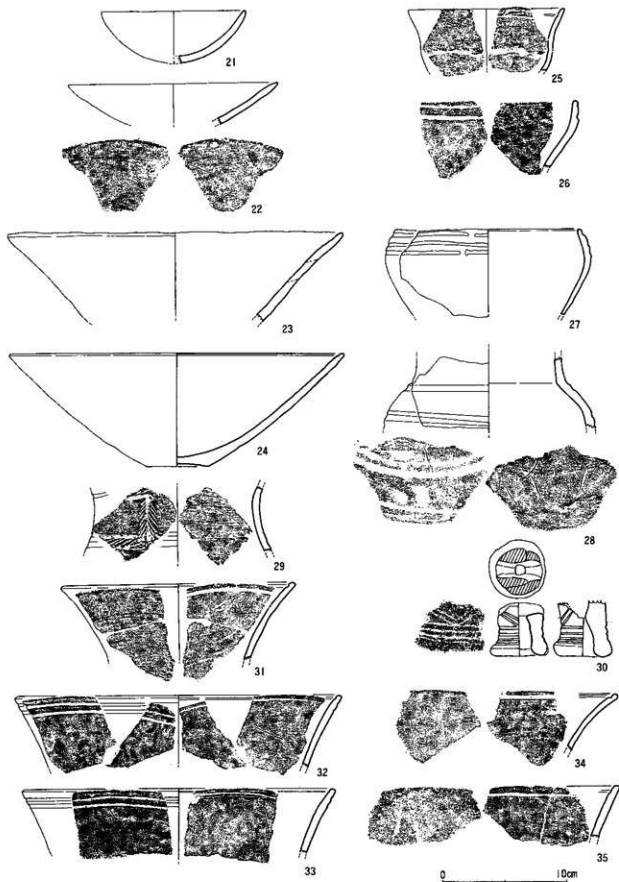
調整は内・外面ヘラミガキである。

(2) まとめ(土器)

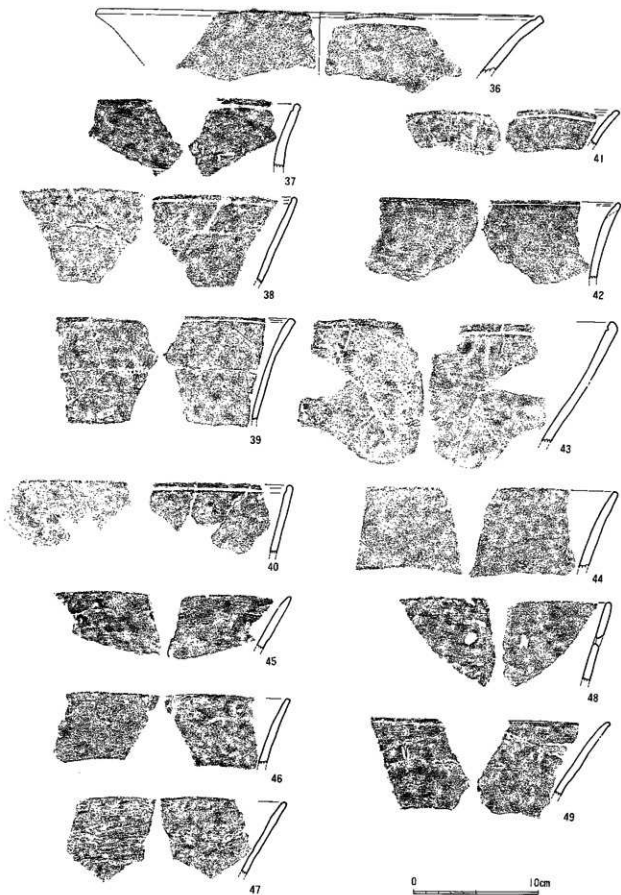
森本遺跡における縄文時代後期の土器はいずれも三万田式土器に属する例で、第2集中部については一括投票されたような状態で出土しており、他の時期の土器を含まないセットとして理解できる。精製土器の中には鳥井原式土器に特徴的な細線羽状文も若干観察できるが、沈線間に細線羽状文を多用しており、三万田式土器の範疇



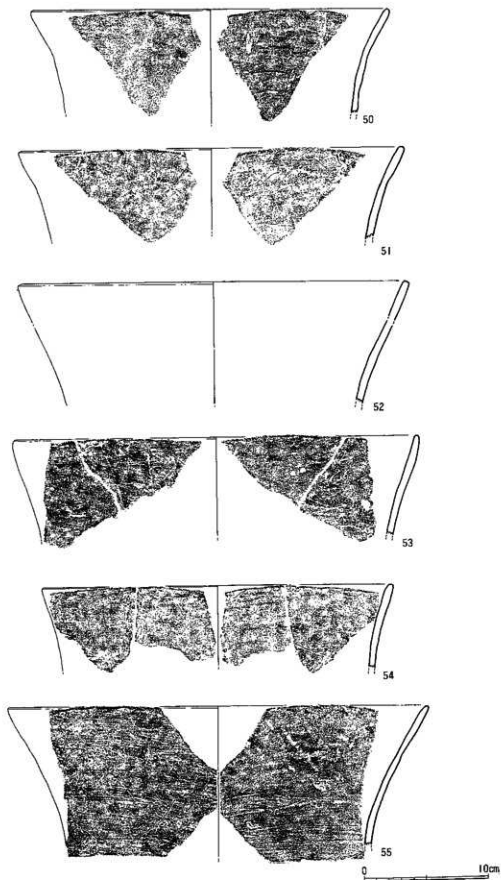
第12図 縄文時代後期一第2集中部の遺物実測図



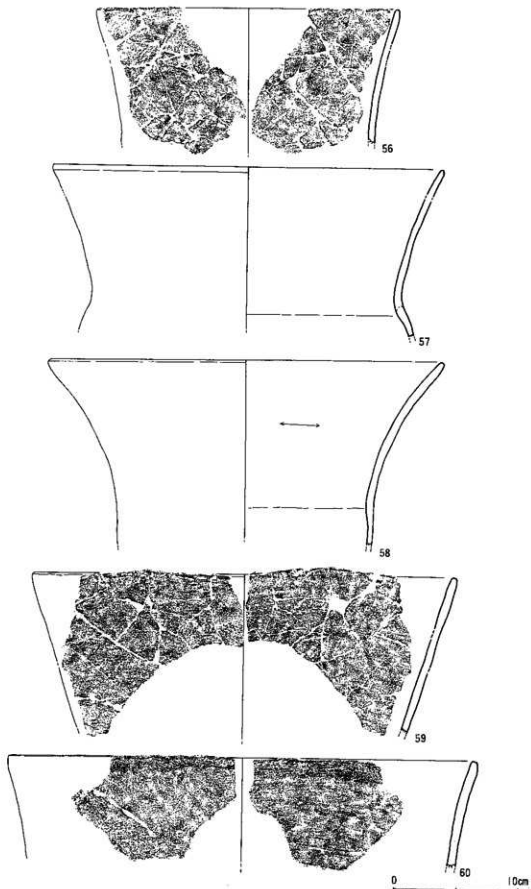
第13図 縄文時代後期一第2集中部の遺物実測図



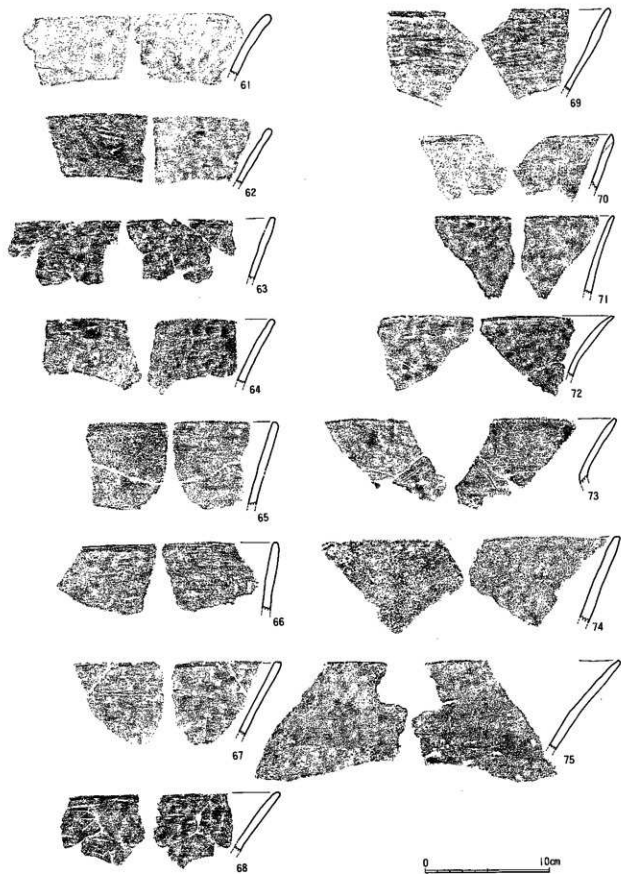
第14図 縄文時代後期一第2集中部の遺物実測図



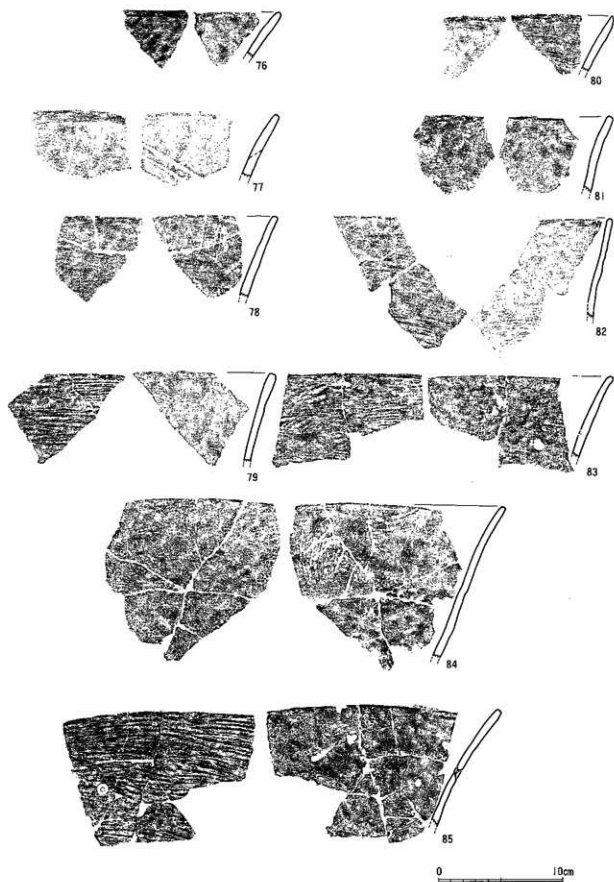
第15図 縄文時代後期一第2集中部の遺物実測図



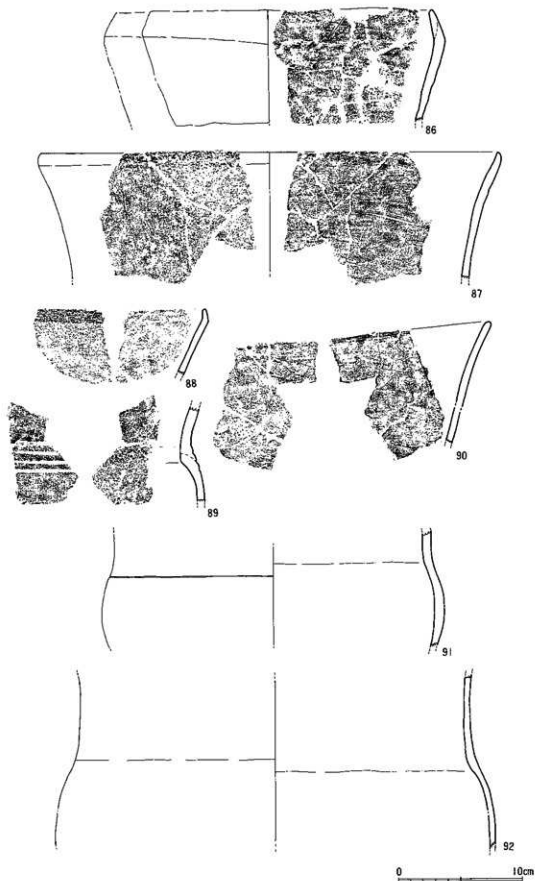
第16図 縄文時代後期—第2集中部の遺物実測図



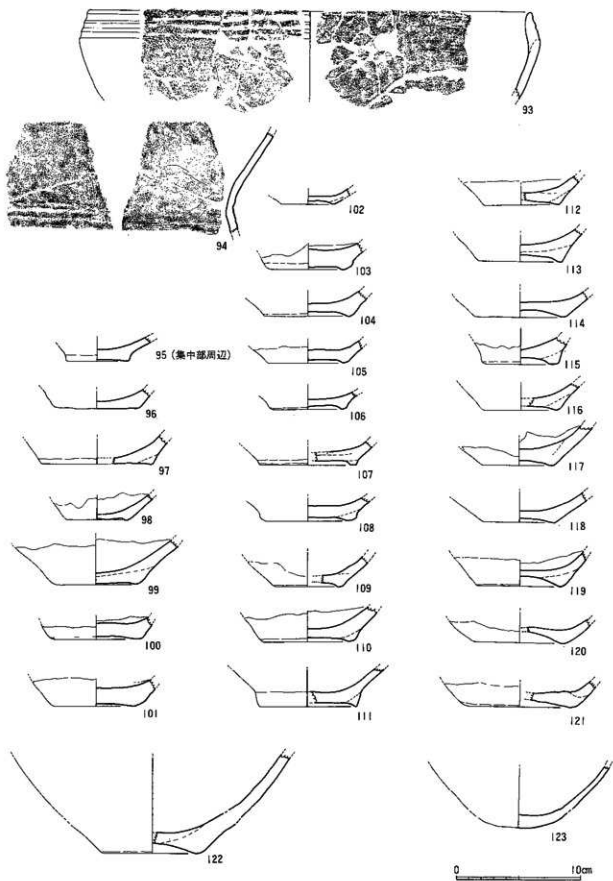
第17図 縄文時代後期一第2集中部の遺物実測図



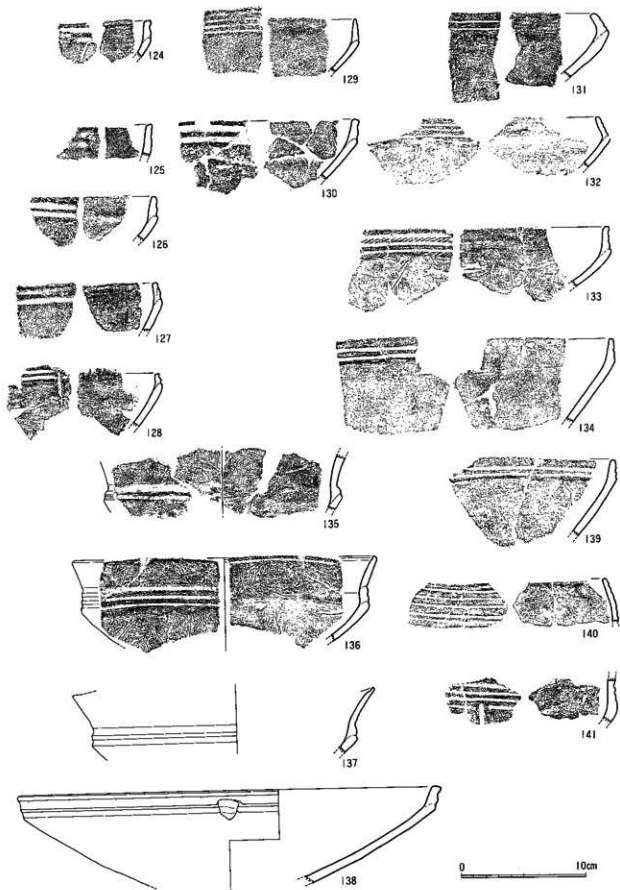
第18図 縄文時代後期—第2集中部の遺物実測図



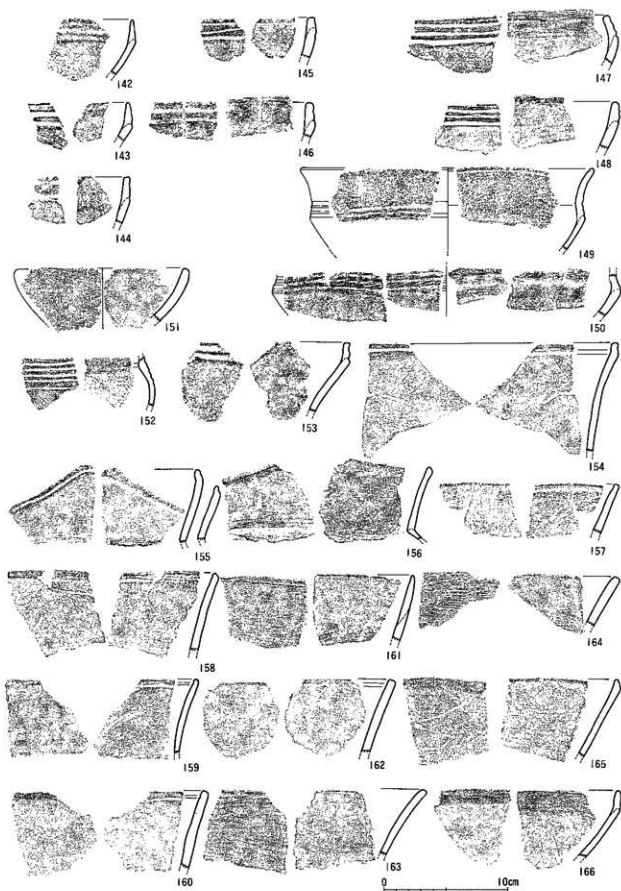
第19図 縄文時代後期一第2集中部の遺物実測図



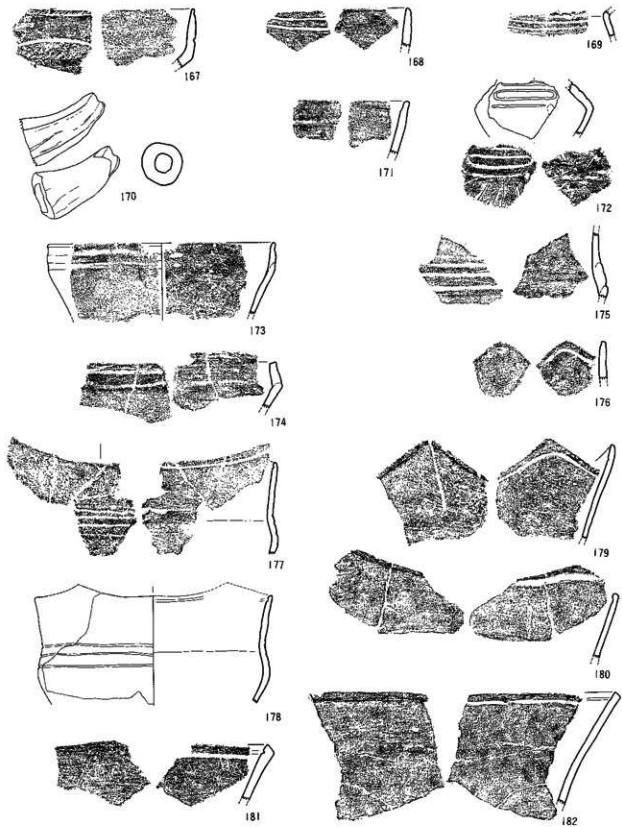
第20図 縄文時代後期—第2集中部の遺物実測図



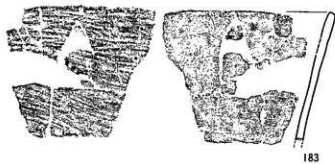
第21図 縄文時代後期一第2集中部外の遺物実測図



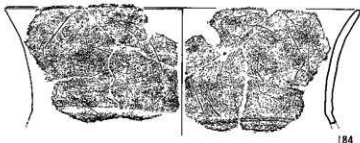
第22図 縄文時代後期一第2集中部の遺物実測図



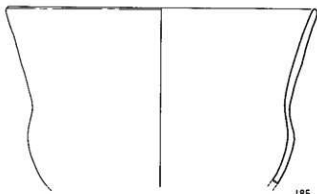
第23図 縄文時代後期一第2集中部外の遺物実測図



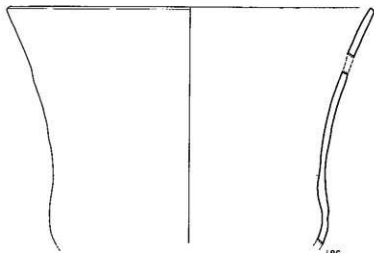
183



184



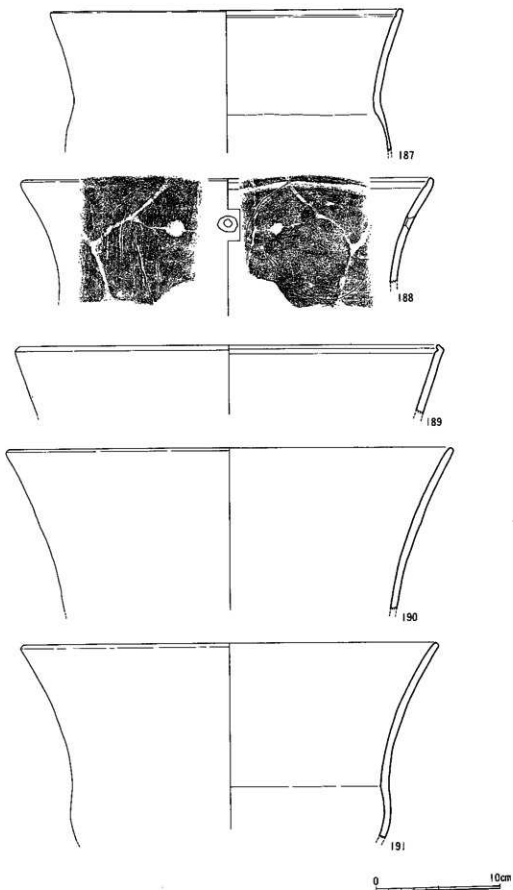
185



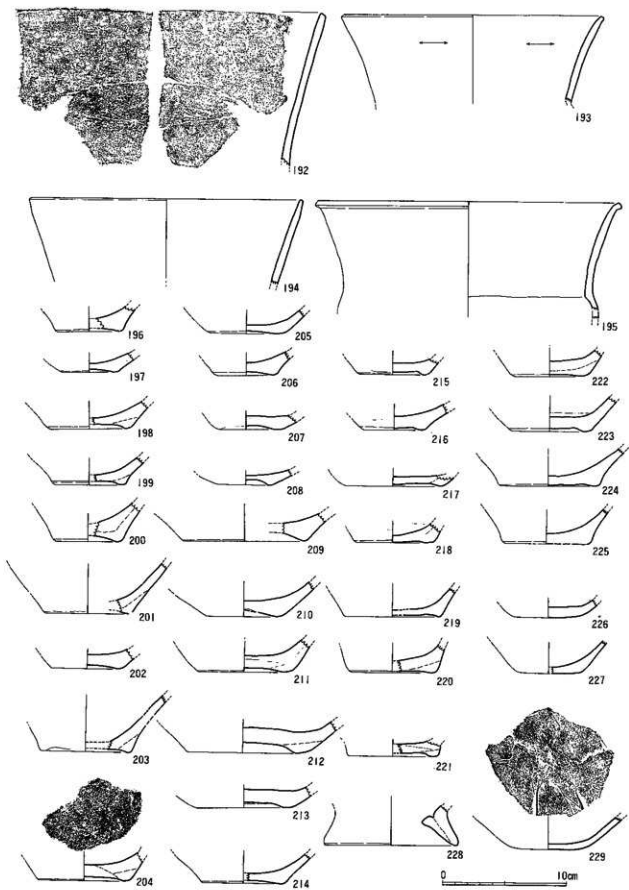
186

0 10cm

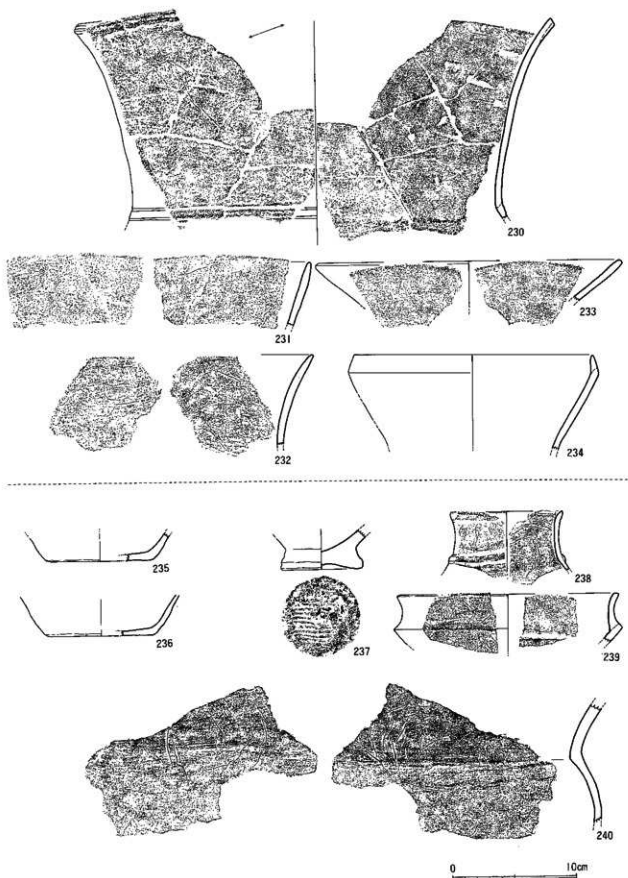
第24図 縄文時代後期一第2集中部外の遺物実測図



第25図 縄文時代後期一第2集中部外の遺物実測図



第26図 縄文時代後期一第2集中部外の遺物実測図



第27図 縄文時代後期一第2集中部外の遺物（上段）・弥生時代早期ほか（下段・東区）遺物実測図

第4表 (1) 森本遺跡の土器観察表

調査番号	出土	遺物番号	部 種	新 土	色 調		断面調整	造 量(cm)	注 記	備 考	検 査 等	
					内 面	外 面						
第1区	1	2	32	浅緑	白色粒・角閃石若干	茶褐色	茶褐色	内・外側ミガキ			口縁部に沈積2本	
	2	2	1733	浅緑	細粒な粒土	茶褐色	茶褐色	内・外側ミガキ			口縁部に沈積2本	
	3	2	18	浅緑	白色粒・角閃石若干	茶褐色	茶褐色	内・外側ミガキ			口縁部に沈積2本	
	4	2	1742	浅緑	細粒な粒土	茶褐色	茶褐色	内・外側ミガキ			口縁部に沈積2本	
	5	2	1984	浅緑	角閃石多量・白色粒・長石若干	茶褐色	茶褐色	内・外側ミガキ			透孔有り	
	6	2	1582	浅緑	細かい白色粒・角閃石	茶褐色	茶褐色	内・外側ミガキ			口縁部に沈積3本	
	7	2	252	浅緑	細かい白色粒・角閃石若干	茶褐色	茶褐色	内・外側ミガキ	23.3		口縁部に沈積2本	
	8	2	862, 859	浅緑	白色粒・角閃石	褐色	褐色	内・外側ミガキ	25.7		口縁部に沈積2本	
	9	2	1633	浅緑	角閃石若干	褐色	褐色	内・外側ミガキ			口縁部に沈積3本	
	10	2	1381	浅緑	白色粒・赤肉・角閃石多量	褐色	褐色	内・外側ミガキ	28.8		口縁部に沈積3本	
	11	2	744	浅緑	角閃石若干	茶褐色	茶褐色	内・外側ミガキ	28.0		口縁部に沈積3本	
	12	2	125	浅緑	白色粒	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ	27.2		口縁部に沈積2本	
	13	2	1274	浅緑	白色粒多量・角閃石若干	茶褐色	茶褐色	内・外側ミガキ			口縁部に沈積2本	
	14	2	124	浅緑	角閃石	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ			口縁部に沈積2本	
	15	2	602, 671	浅緑	白色粒・角閃石多量	茶褐色	茶褐色	内・外側ミガキ			口縁部に沈積2本	
	16	2	150	浅緑	微細な白色粒多量・角閃石若干	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ			口縁部に沈積2本	
	17	2	56, 104, 305	浅緑	微細な白色粒・角閃石少量	褐色	黄褐色	内・外側ミガキ	23.9		口縁部に沈積1本	
	18	2	200, 1013	浅緑	白色粒・角閃石若干	黄褐色	黒色	内側ミガキ 外側口縁部あたりは赤褐色ミガキ	27.4		口縁部に巻き貝痕 口縁部に沈積3本	
	19	2	1015	浅緑	白色粒多量・角閃石若干	黄褐色	黒色	内側ミガキ			口縁部に沈積3本	
	20	2	1265	浅緑	微細な白色粒	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ			口縁部に沈積3本	
	21	2	1595	浅緑	角閃石多量	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ			口縁部に沈積3本	
	22	2	1723	浅緑	白色粒・角閃石若干	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ	31.6			
	23	2	847	浅緑	角閃石・白色粒多量	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ	26.1			
	24	2	863	浅緑	白色粒多量	黄褐色	茶褐色	内・外側ミガキ	27.8	9.1	5.1	口縁部に沈積1本
	25	2	1406	緑	石灰粒・角閃石若干	暗灰色	暗灰色	内・外側ミガキ	12.7		口縁部に沈積1本	
	26	2	1713	浅緑	白色粒多量・角閃石・石葉若干	茶褐色	黄褐色	内・外側ミガキ			口縁部に沈積2本	
	27	2	857	浅緑	白色粒多量・角閃石・石葉若干	白灰色	黄褐色	不明		15.0		口縁部に沈積3本
	28	2	1494	黄緑	角閃石・石灰多量	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ			透孔有り	
	29	2	1553	黄緑	白色粒・石灰若干	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ			透孔有り	
	30	2	338	黄緑	白色粒多量・角閃石多量	暗灰色	暗灰色	内・外側ミガキ			4.7	
	31	2	97	黄緑	白色粒若干	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ	18.3			
	32	2	1733	深緑	細粒な粒土	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ	26.0			
	33	2	391	深緑	茶石多量・角閃石若干	暗灰色	暗灰色	内・外側ミガキ	25.0			
	34	2	1660	深緑	石灰・白色粒多量	黄褐色	白灰色	内・外側ミガキ				
	35	2	1720	深緑	石灰・角閃石若干	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ				
	36	2	1713	深緑	白色粒多量	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ	36.0			
	37	2	1124	深緑	白色粒・角閃石多量	暗灰色	暗灰色	内・外側ミガキ				
	38	2	1862	深緑	石灰・白色粒多量	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ				
	39	2	2	深緑	石灰・角閃石多量	黄褐色	白灰色	内・外側ミガキ				
	40	2	758	深緑	白色粒多量・角閃石・石灰若干	灰色	暗灰色	内・外側ミガキ				
	41	2	795	深緑	白色粒多量・角閃石若干	黄褐色	褐色	内・外側ミガキ				
	42	2	861	深緑	白色粒多量・角閃石若干	黄褐色	褐色	内・外側ミガキ				
	43	2	171	深緑	白色粒多量	黄褐色	黄褐色	内側ミガキ				
	44	2	218	深緑	微細な角閃石多量	黄褐色	茶褐色	内・外側ミガキ				
	45	2	1110	深緑	白色粒・角閃石若干	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ				
	46	2	1361	深緑	白色粒多量・角閃石若干	黄褐色	褐色	内・外側ミガキ				
	47	2	398	深緑	白色粒多量・角閃石・石葉若干	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ				
	48	2	1284	深緑	白色粒多量・石灰少量	暗灰色	暗灰色	内・外側ミガキ				
	49	2	1162	深緑	角閃石若干	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ				
	50	2	46	深緑	石灰・角閃石若干	白灰色	黄褐色	内・外側ミガキ			28.8	
	51	2	369	深緑	微細な白色粒多量・赤色粒若干	茶褐色	褐色	内・外側ミガキ	39.8			
	52	2	1090	深緑	白色粒・角閃石	茶褐色	褐色	内・外側ミガキ	31.1			
	53	2	896	深緑	角閃石若干	灰色	褐色	内・外側ミガキ	28.2			
	54	2	1712	深緑	角閃石・石灰若干	灰色	褐色	内・外側ミガキ	32.7			
	55	2	1623	深緑	角閃石・白色粒多量	黄褐色	褐色	内・外側ミガキ	34.0			
	56	2	369	深緑	白色粒多量	黒色	黒色	内・外側ミガキ	24.3			
	57	2	835	深緑	角閃石・白色粒多量	黄褐色	茶褐色	内・外側ミガキ	31.8			
	58	2	634	深緑	微細な白色粒	黄褐色	暗灰色	内・外側ミガキ	31.8			
	59	2	396, 896	深緑	石灰・角閃石若干	黄褐色	茶褐色	内・外側ミガキ	34.2			
	60	2	1379	深緑	石灰・角閃石多量	茶褐色	茶褐色	内・外側ミガキ	37.5			
	61	2	246	深緑	石灰・白色粒・角閃石多量	黄褐色	白灰色	内・外側ミガキ				
	62	2	1679	深緑	白色粒多量・角閃石若干	茶褐色	黄褐色	内・外側ミガキ				
	63	2	1518	深緑	白色粒・石灰	茶褐色	暗灰色	内・外側ミガキ				
	64	2	1285	深緑	白色粒多量	黄褐色	暗灰色	内・外側ミガキ				
	65	2	1656	深緑	石灰・角閃石若干	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ				
	66	2	116	深緑	白色粒若干・角閃石若干	暗褐色	褐色	内・外側ミガキ				
	67	2	659, 665	深緑	白色粒・石灰・角閃石若干	黄褐色	黄褐色	内・外側ミガキ				
	68	2	236	深緑	白色粒・角閃石多量	褐色	暗灰色	内・外側ミガキ				
	69	2	344	深緑	白色粒多量	黄褐色	暗灰色	内・外側ミガキ				
	70	2	138	深緑	白色粒若干	黄褐色	暗灰色	内・外側ミガキ				
	71	2	1137	深緑	白色粒・角閃石・石灰多量	褐色	茶褐色	内側ミガキ				

に入る例である。

三万田式土器については、後藤一重氏によって7段階に細分がなされている(後藤1985)。そこでは大野川中流域に所在する全ての遺跡それぞれが、結果的に一遺跡一時期、一住居跡一時期になっている。むしろ縄文時代人の生活が遺跡ごとに異なることに器種構成上の違いがあるのかわからないかを検証できないだろうか。とはいえ、後

第4表 (2) 森本遺跡の土器観察表

検出番号	出土区	遺物番号	器種	胎土	色		器型別整	流 量(cm)		施文等
					内面	外面		1径	器高	
# 70	2	347	深鉢	黄褐色多量、白色砂多量	黄灰色	褐色	内・外面ヘタミガキ			
# 71	2	1498	深鉢	白色砂多量、黄褐色少量	褐色	褐色	内・外面ミガキ			
# 74	2	339	深鉢	白色砂、褐色砂、黄褐色若干	茶褐色	白色				
# 75	2	634	深鉢	黄褐色白色砂多量、黄褐色若干	茶褐色	褐色	内・外面ナデ			
# 77	2	1655	深鉢	白色砂多量、黄褐色若干	黄灰色	褐色	内・外面ミガキ			
# 78	2	242	深鉢	白色砂多量、内面白若干	黄褐色	褐色	内・外面ミガキ			
# 79	2	46	深鉢	黄褐色多量	白色	褐色	内・外面ミガキ			
# 79	2	358	深鉢	黄褐色白色砂	黄褐色	褐色	内面黄褐色多量、外・外面白若干			
# 80	2	206	深鉢	黄褐色黄褐色、石灰・白色砂	茶褐色	褐色	内・外面ナデミガキ			
# 81	2	1705	深鉢	石灰・黄褐色多量	黄灰色	褐色	内・外面ミガキ			
# 81	2	89	深鉢	白色砂多量	黄褐色	褐色				
# 81	2	912	深鉢	石灰、白色砂	黄褐色	褐色	内・外面黄褐色多量、外ミガキ			
# 81	2	1307	深鉢	石灰・黄褐色若干	黄褐色	褐色	内・外面ミガキ			
# 81	2	643	深鉢	白色砂、黄褐色、石灰若干	褐色	褐色	内・外面黄褐色多量			
# 82	2	634	深鉢	白色砂多量	黄褐色	褐色	内面ナデ	25.6		
# 82	2	90	深鉢	石灰、黄褐色、黄褐色	黄褐色	褐色	内・外面ナデ、外縁白若干	37.1		
# 82	2	240	深鉢	石灰・白色砂多量、内面白若干	茶褐色	褐色	内・外面ナデ			
# 82	2	184	深鉢	黄褐色、黄褐色	黄褐色	褐色	内面不明、外面ミガキ			胴部に化粧4本
# 82	2	1600	深鉢	石灰・黄褐色、白色砂多量	黄褐色	褐色	内面ミガキ、外面ナデ			
# 82	2	634	深鉢	黄褐色白色砂多量、内面白若干	茶褐色	褐色	内・外面ナデ			胴部に化粧1本
# 82	2	1563	深鉢	黄褐色多量	黄褐色	褐色	内・外面ナデ			
# 82	2	357	深鉢	石灰・黄褐色多量	黄褐色	褐色	内・外面ヘタミガキ	35.9		
# 84	2	190	深鉢	白色砂多量	黄褐色	褐色	内・外面ミガキ			胴部に化粧3本
# 85	2	5	深鉢	石灰・白色砂、内面白若干	灰色	黄褐色	内・外面ナデ			4.9
# 86	2	1113	深鉢	石灰・白色砂多量	褐色	茶褐色	内面ミガキ、外面不明			6.7
# 87	2	1165	深鉢	石灰・白色砂多量	褐色	茶褐色	内面ナデ、外面不明			3.9
# 88	2	240	深鉢	石灰・白色砂多量、内面白若干	茶褐色	褐色	内・外面ナデ			6.4
# 88	2	749	深鉢	白色砂多量、石灰若干	黄褐色	褐色	内・外面ミガキ			3.1
# 88	2	924	深鉢	石灰多量、内面白若干	黄褐色	褐色	内・外面ミガキ			7.0
# 100	2	347	深鉢	白色砂、内面白若干	黄褐色	褐色	内・外面ナデ			7.5
# 101	2	1594	深鉢	黄褐色、黄褐色、黄褐色多量	黄褐色	褐色	内・外面ミガキ			6.5
# 101	2	120	深鉢	黄褐色多量、白色砂若干	黄褐色	褐色	内・外面ミガキ、外縁ナデ			4.3
# 101	2	732	深鉢	石灰・黄褐色若干	黄褐色	褐色	内・外面ナデ			6.4
# 101	2	223	深鉢	石灰多量	黄褐色	褐色	内面ミガキ、外面不明			6.9
# 102	2	1292	深鉢	石灰多量	黄褐色	褐色	内・外面ナデ			6.2
# 102	2	1385	深鉢	白色砂多量	黄褐色	褐色	内・外面ミガキ			3.8
# 107	2	1161	深鉢	白色砂多量、黄褐色若干	黄褐色	褐色	内・外面ミガキ			7.8
# 108	2	239	深鉢	石灰、白色砂、黄褐色	白色	茶褐色	内・外面ナデ			7.5
# 109	2	179	深鉢	石灰・白色砂、黄褐色	黄褐色	褐色	内・外面ミガキ、外縁3本			5.3
# 110	2	1835	深鉢	石灰・白色砂多量、内面白若干	茶褐色	褐色	内面ミガキ、外面不明			7.3
# 111	2	1605	深鉢	石灰・黄褐色多量	白色	茶褐色	内面ミガキ、外面ナデ			7.9
# 112	2	398	深鉢	白色砂、内面白若干、石灰若干	白色	茶褐色	内・外面ナデ			6.0
# 113	2	1725	深鉢	内面白、石灰多量	白色	茶褐色	内・外面ナデ、外面不明			6.6
# 114	2	161	深鉢	石灰・白色砂、黄褐色	褐色	茶褐色	内・外面ミガキ、外縁2本			7.4
# 115	2	1477	深鉢	白色砂、内面白若干	褐色	茶褐色	内面ミガキ、外面不明			6.0
# 116	2	1613	深鉢	白色砂、黄褐色多量	褐色	茶褐色	内・外面ナデ			6.3
# 117	2	994	深鉢	白色砂多量、石灰若干	黄褐色	褐色	内・外面ナデ			5.8
# 118	2	1063	深鉢	黄褐色、石灰多量	褐色	茶褐色	内・外面ミガキ			5.9
# 119	2	1692	深鉢	白色砂多量	白色	茶褐色	内・外面ミガキ			6.9
# 120	2	918	深鉢	白色砂多量	黄褐色	褐色	不明			7.5
# 121	2	1233	深鉢	白色砂、石灰	白色	茶褐色	内・外面ナデ			9.3
# 122	2	1304	深鉢	白色砂多量、黄褐色若干	褐色	茶褐色	内・外面ミガキ			7.8
# 123	2	1518	深鉢	石灰・黄褐色多量	黄褐色	褐色	内面ミガキ、外面不明			
# 124	C 4	110	浅鉢	白色砂多量	黄褐色	褐色				
# 125	C 4	181	浅鉢	黄褐色白色砂若干	褐色	黄褐色	内・外面ヘタミガキ			口縁部に化粧2本 身置成有
# 125	C 4	1213	浅鉢	白色砂多量	褐色	黄褐色	内・外面ヘタミガキ			口縁部に化粧2本
# 127	C 4	1164	浅鉢	白色砂多量、内面白若干	茶褐色	褐色	内・外面ヘタミガキ			口縁部に化粧2本
# 128	C 2	88	浅鉢	白色砂、黄褐色若干	黄褐色	黄褐色	内・外面ミガキ			口縁部に化粧2本、胴状文
# 129	C 4	2060	浅鉢	黄褐色白色砂、黄褐色若干	茶褐色	茶褐色	内・外面ヘタミガキ			口縁部に化粧4本
# 130	C 4	156	浅鉢	白色砂、黄褐色	褐色	白色	内・外面ヘタミガキ			口縁部に化粧2本
# 131	B 4	132	浅鉢	白色砂若干	褐色	褐色	内・外面ミガキ			口縁部に化粧2本、研ぎ文
# 132	C 4	547	浅鉢	黄褐色、黄褐色若干	茶褐色	茶褐色	内・外面ナデ			口縁部に化粧3本
# 133	C 4	226	浅鉢	黄褐色多量	黄褐色	褐色	内・外面ヘタミガキ			口縁部に化粧3本、研ぎ文
# 134	C 4	244	浅鉢	黄褐色白色砂多量	褐色	黄褐色	内面ヘタミガキ、外縁黄褐色ミガキ			口縁部に化粧2本
# 135	C 4	119_130	浅鉢	白色砂多量、内面白若干	黄褐色	黄褐色	内・外面ヘタミガキ			胴部に化粧2本
# 136	C 4	73	浅鉢	内面白多量	黄褐色	黄褐色	内・外面ヘタミガキ			24.4
# 137	C 4	270	浅鉢	白色砂多量	黄褐色	茶褐色	内・外面ヘタミガキ			24.4
# 138	C 4	16_70_781_970	浅鉢	黄褐色白色砂	褐色	黄褐色	内・外面ヘタミガキ			34.3
# 139	C 4	130	浅鉢	黄褐色白色砂	黄褐色	黄褐色	内・外面ヘタミガキ			口縁部に化粧2本
# 140	C 3	537	浅鉢	白色砂多量	黄褐色	黄褐色	内・外面ヘタミガキ			口縁部に化粧2本
# 141	C 2	16_35	浅鉢	白色砂多量	黄褐色	黄褐色	内・外面ミガキ			口縁部に化粧4本

藤氏のいう器種構成等の変異は微妙な時期差を反映している可能性もある。しかしその時期差は微妙であり、森本遺跡第2集中部を中心とする土器群は大きく、三万田式の範疇に含めておきたい。

参考文献、後藤一重1985「内河野遺跡」「野津川流域の遺跡」VI、野津町教育委員会。

第4表 (3) 森本遺跡の土器観察表

探出番号	出土	遺物番号	器 種	備 考	色 調		器 形 割 裂	造 量 (cm)	施 文 等
					内 面	外 面			
第22期C									
# 140	C.3	449	浅鉢	白色粘片多	黒褐色	上端部 下黄褐色	内・外縁ミガキ		口縁部に沈線2本
# 146	C.3	303	浅鉢	白色粘片多, 角閃石若干	褐色	褐色	内・外縁ミガキ		口縁部に沈線2本
# 145	C.3	801	浅鉢	白色粘片多	褐色	褐色	内・外縁ミガキ		口縁部に沈線2本
# 146	C.3	184	深鉢	角閃石多	黒褐色	茶褐色	内・外縁ミガキ		口縁部に沈線3本
# 147	C.3	317	浅鉢	白色粘片多	褐色	褐色	内・外縁ミガキ		口縁部に沈線3本
# 148	C.3	329	浅鉢	白色粘片多	黒色	上端部 下黄褐色	内・外縁ミガキ		口縁部に沈線3本
# 149	C.3	280, 327	深鉢		黄褐色	黄褐色	内面ミガキ 外面不明	23.8	縁に沈線1本 内部に沈線1本 底部に沈線1本 縁部
# 139	C.3	335	浅鉢	白色粘片多	黄褐色	黄褐色	内面ミガキ 外面不明		
# 132	C.3	2147	浅鉢	白色粘片, 石英, 厚苔岩若干	黄褐色	黄褐色	内・外面ミガキ		
# 132	C.3	415	浅鉢	白色粘片多	褐色	褐色	内面不明 外面ミガキ		
# 131	C.3	744	浅鉢	白色粘片	暗灰色	黄褐色	内・外縁ミガキ		胴部に沈線5本
# 154	C.3	284	深鉢	角閃石若干	灰色	灰色	内・外縁ミガキ		口縁部に沈線2本
# 135	C.3	436	鉢	白色粘片多	茶褐色	褐色	内・外面ミガキ		口縁部に沈線1本
# 136	C.3	215	鉢	白色粘片多	褐色	暗灰色	内・外縁ミガキ		
# 137	C.3	73	深鉢	白色粘片多	黄褐色	褐色	内面ミガキ 外面ナシ後ミガキ		口縁内部に沈線1本
# 138	C.3	297	深鉢	白色粘片多, 石英若干	黄褐色	暗灰色	内・外面ミガキ		口縁内部に沈線1本
# 139	C.3	673	深鉢	白色粘片多, 内閃石若干	黄褐色	暗灰色	内・外面ミガキ		口縁内部に沈線1本
# 140	C.3		深鉢	白色粘片多, 長石・角閃石若干	黄褐色	茶褐色	内・外面ミガキ		口縁内部に沈線1本
# 141	C.4	1075	深鉢	白色粘片多, 角閃石若干	茶褐色	黄褐色	内・外縁ミガキ		
# 142	C.3	33	深鉢	白色粘片多, 角閃石	褐色	褐色	内・外面ミガキ		口縁内部に沈線1本
# 143	C.3	749	深鉢	白色粘片多	褐色	黄褐色	内面ミガキ 外面縁部ミガキ		
# 144	C.3	610	深鉢	白色粘片多	黒色	黒褐色	内面ナシ 外面ナシ後ミガキ		
# 145	C.4	596	深鉢	黄褐色白色粘片, 灰石, 角閃石	茶褐色	黄褐色	内面ミガキ 外面ナシ後ミガキ		
# 146	C.3	410	深鉢	白色粘片多	黄褐色	褐色	内・外縁ミガキ		
第23期C.4									
# 147	C.4	597	浅鉢	角閃石多	黄褐色	暗灰色	内面不明 外面ヘラミガキ		口縁部に沈線24箇所
# 148	C.3	901	深鉢	内閃石若干	黄褐色	黄褐色	内・外面ナシ		口縁部に沈線1本 縁部
# 149	C.4	962, 987	深鉢	黄褐色白色粘片	黄褐色	黄褐色	内・外縁ヘラミガキ		胴部に沈線3本 縁部
# 170	C.4	169	皿・鉢	長石・角閃石多	茶褐色	暗灰色	内面調整ミガキ 外面ヘラミガキ		
# 171	C.4	631	深鉢	白色粘片, 角閃石多	黄褐色	暗灰色	内面ミガキ		縁部
# 172	C.4	2934	浅鉢	白色粘片多	褐色	褐色	内面ナシ 外面ヘラミガキ		沈線4本
# 173	C.4	714	深鉢	白色粘片, 石英, 角閃石多	暗灰色	褐色	内・外縁ヘラミガキ	18.2	口縁部に沈線2本
# 174	C.4	647	浅鉢	白色粘片・角閃石多	茶褐色	黄褐色	内・外面ナシ		口縁部に沈線2本
# 175	C.4	2226	浅鉢	白色粘片・赤色粘片多	黄褐色	暗灰色	内面ナシ 外面ヘラミガキ		胴部に沈線3本
# 176	C.4	466	皿・鉢	長石	暗褐色	暗褐色	内・外縁ヘラミガキ		口縁内部に沈線1本 縁部
# 177	C.3	548 551	鉢	白色粘片多	上端部 下黄褐色	茶褐色	内・外縁ヘラミガキ		口縁内部に沈線1本 縁部
# 178	C.3	97, 547	鉢	白色粘片多	暗灰色	黄褐色	内・外縁ヘラミガキ	10.2	口縁内部に沈線1本 縁部
# 179	C.3	146	鉢	白色粘片多, 内閃石若干	黄褐色	灰色	内・外縁ヘラミガキ		口縁部に沈線1本 縁部
# 180	C.4	788, 875	鉢	黄褐色白色粘片多	茶褐色	黒色	内・外縁ヘラミガキ		口縁部に沈線1本
# 181	2出		深鉢	白色粘片多	黄褐色	黄褐色	内・外縁ヘラミガキ		口縁内部に沈線1本
# 182	C.4	792	深鉢	黄褐色粘片	黄褐色	暗灰色	内・外縁ヘラミガキ		口縁内部に沈線1本
第24期C.4									
# 183	C.3	307	深鉢	黄褐色粘片	暗灰色	暗灰色	内面ヘラミガキ 外面縁部	28.8	口縁部に沈線1本 胴部
# 24	C.3	19		角閃石多, 白色粘片, 石英	黄褐色	黄褐色	内面ナシ 外面ナシ後ミガキ	25.0	口縁部に沈線1本 胴部
# 185	C.4	130	深鉢	黄褐色白色粘片多	黄褐色	灰色	内・外縁ヘラミガキ		
第25期C.4									
# 186	C.4	69, 43	深鉢	白色粘片・赤色粘片多, 角閃石若干	黄褐色	黄褐色	内面ヘラミガキ 外面縁部	28.6	口縁内部に沈線1本
# 187	C.4	163, 228	深鉢	黄褐色白色粘片	茶褐色	褐色	内面ヘラミガキ 外面縁部	33.2	口縁内部に沈線1本
# 188	C.4	713	深鉢	白色粘片多	茶褐色	黄褐色	内・外縁ヘラミガキ	34.0	口縁内部に沈線1本
# 190	C.4		深鉢	白色粘片・石英多	暗灰色	茶褐色	内・外縁ヘラミガキ	35.8	
# 191	C.4	236, 67 208	深鉢	黄褐色白色粘片・角閃石多	暗灰色	暗灰色	内・外縁ヘラミガキ	33.5	
第26期C.3									
# 192	C.4	58, 158 60, 227	深鉢	黄褐色白色粘片多, 角閃石若干	黄褐色	暗灰色	内面ナシ 外面縁部	20.9	口縁内部に沈線1本 縁部
# 193	C.4	859	深鉢	白色粘片多, 角閃石	暗灰色	黄褐色	内・外縁ヘラミガキ	22.0	
# 195	C.3	78	深鉢	白色粘片多, 角閃石若干	黄褐色	暗灰色	内・外縁ヘラミガキ	24.4	
# 196	C.4	2186		白色粘片多	褐色	暗灰色	内面ミガキ 外面不明		5.2
# 197	C.4	398		長石・角閃石多	白色	茶褐色	内面ミガキ 外面ナシ		4.5
# 198	C.3	343		白色粘片・長石多	暗灰色	暗灰色	内面ミガキ 外面ナシ		6.3
# 199	C.3	256		白色粘片多	黒色	暗灰色	内面ミガキ 外面不明		5.8
# 200	C.3	193		白色粘片多	黄褐色	黄褐色	内・外面ナシ		5.2
# 201	C.4	1099		白色粘片・石英・角閃石多	灰色	茶褐色	内・外面ナシ		6.0
# 202	C.3	572		白色粘片多, 長石若干	黄褐色	黄褐色	内・外面ナシ		5.6
# 203	C.3	85, 42 668		白色粘片多, 角閃石多	黒色	茶褐色	内・外面ミガキ		7.3
# 204	C.3	151		長石・白色粘片多	褐色	茶褐色	内面ナシ 外面不明		7.3
# 205	C.4	1101		白色粘片・長石・角閃石若干	灰色	茶褐色	内面ミガキ 外面ナシ		5.8
# 206	C.4	664		白色粘片・石英多	灰色	暗茶褐色	内面ミガキ 外面ナシ		4.8
# 207	C.4	641		石英・白色粘片多	褐色	黄褐色	内面ナシ 外面不明		5.4
# 208	C.3	630		角閃石・長石多	茶褐色	暗褐色	内面ヘラミガキ 外面ナシ		4.7
# 209	C.3	318		灰石・角閃石若干	黄褐色	暗灰色	内・外面ナシ		9.7

第4表 (4) 森本遺跡の土器観察表

採出番号	出土区	遺物番号	器種	胎土		色調		胎面調整	径		備考等
				内面	外面	内面	外面		口径	高さ	
森本遺跡	C 7	727		灰白・角閃石多量		褐色	茶褐色	内面ミガキ	外面不明		5.8
# 211	C 4	274		白化粧・石炭多量、角閃石若干		褐色	褐色	内・外面ミガキ			7.7
# 212	C 3	698		石灰・白化粧、角閃石若干		暗灰色	暗灰色	内・外面ミガキ			8.9
# 213	C 3	538		白色胎多量、角閃石若干		白灰色	暗灰色	内・外面ミガキ			7.8
# 214	C 3	471		白色胎多量、角閃石若干		灰白色	茶褐色	内面ミガキ	外面ミガキ		5.5
# 215	C 2	24		白色胎多量		褐色	赤褐色	内・外面ミガキ			3.7
# 216	C 4	2237		白色胎多量		褐色	茶褐色	内・外面ミガキ			4.9
# 217	C 4	306		白色胎多量		褐色	褐色	内面ミガキ	外面不明		6.2
# 218	C 4	469		白化粧・石炭多量		灰白色	茶褐色	内・外面ミガキ	外面不明		7.8
# 219	C 4	130		白色胎・石炭多量		灰白色	茶褐色	内・外面ミガキ	外面不明		6.2
# 220	C 3	363		白色胎多量		暗灰色	茶褐色	内面ミガキ	外面不明		7.2
# 221	C 3	347		白化粧・角閃石若干		暗灰色	茶褐色	内・外面ミガキ			6.9
# 222	C 4	2116		磨製な白色胎多量		赤褐色	褐色	内面ミガキ	外面不明		5.5
# 223	C 4	2237		白色胎・石炭多量		暗灰色	茶褐色	内・外面ミガキ			6.2
# 224	C 3	93, 319		白化粧・石炭多量		暗灰色	茶褐色	内面ミガキ	外面不明		7.8
# 225	C 2	49, 258		白色胎多量		茶褐色	茶褐色	内面ミガキ	外面不明		6.7
# 226	C 1	27		白色胎多量、角閃石若干		褐色	暗灰色	内・外面ミガキ			5.4
# 227	C 4	866		白色胎多量		褐色	暗灰色	内面ミガキ	外面ミガキ		5.1
# 228	C 3	317, 344	深鉢	白色胎多量、角閃石若干		褐色	茶褐色	内・外面ミガキ			10.7
# 229	C 3	362		白色胎多量、角閃石若干		褐色	茶褐色	内・外面ミガキ			5.2
森本遺跡	C 4	177, 173	深鉢	白化粧・石灰・角閃石多量		褐色	褐色	内面ミガキ	外面ミガキ	38.3	口縁に浅線1本 胎面に浅線2本
# 230	C 4	362	深鉢	磨製な白色胎		茶褐色	褐色	内・外面ミガキ			8.6
# 231	C 4	1181	深鉢	白色胎多量、角閃石若干		暗灰色	暗灰色	内・外面ミガキ			8.4
# 232	C 3	137		磨製な白色胎		灰白色	灰白色	内・外面ミガキ			24.4
# 234	C 3	320		白色胎・角閃石多量		暗灰色	暗灰色	内・外面ミガキ			19.3
# 235	B 3	109	短冊	磨製な白色胎		灰白色	灰白色	内・外面ミガキ			8.6
# 236	B 4	865, 865	土師器	磨製な白色胎		茶褐色	茶褐色	内・外面ミガキ			8.4
# 237	東区			磨製な白色胎		暗灰色	茶褐色	内・外面ミガキ	胎面多量調整		5.4
# 238											
# 239											
# 240	東区		深鉢	白色胎・角閃石多量		赤褐色	赤褐色	内面ミガキ	外面ミガキ		

(3) 石器類

第6表の石器・石材組成表は第2集中部・B4区・B5区・B3区・C4区・C5区・D4区・D5区・東区から出土した小形の石器・剥片・石核類のうちわけである。これらの地区ではおむね縄文時代後期(三万田式土器期)に属する土器が比較的多く、石器・剥片類もこれに準じて考えられよう。しかし三万田式土器分布域と隣接する突帯文土器分布域の凡その境界は第11図のとおりであるが、第6表では厳密な意味での時期区分は行っていない。分布から見て厳密な意味で三万田式土器期に属するのは第2集中部とB4区・C4区・C5区・D5区の石器類である。

まず一括廃棄されたかのような高密度の分布を示す第2集中部の様子を見る。ここから回収された石器・剥片類のうち最も多いのが4cmまでの長さを中心とする剥片・碎片類である。これは、石器の数量や小規模な剥片が大半であることからみると、石鏝を中心とした小型石器の製作に関わる状況を示していると言えよう。

第6表に示された第2集中部の道具としての石器は、狩猟具=石鏝18点、切削具=スクレイパー2点、切削具=RF・UF4点、工具=楔形石器1点からなる。その他、掘削具=扁平打製石斧3点がある。石器組成の中で目を引くのは、扁平打製石斧の量がすくないことであろう。九州地区の縄文時代後期後半～晩期の遺跡においては多量の当該石器が回収されることで知られている。こうした点からすると森本遺跡第2集中部における石器組成の状況は遺跡性格を理解するポイントにならう。扁平打製石斧は、森本遺跡の他の集中部・地区・陽弓遺跡においても少量であることが判っており、この地域の特徴である。こうした状況は、石器製作と狩猟を中心とした採集生活であるが、扁平打製石斧による根菜類の採取を重視した採集生活でなかった可能性がある。

石器類の石材で最も多いのは、姫島産黒曜石で、316点・922gからなる。姫島産黒曜石が第2集中部内の石器石材に占める割合は94%である。これに次ぐのがササカイトで、40点・54.8gとなる。ササカイトのほとんどは香川県金山産と見られる。ガラス買安山岩は2点で7g・1%とわずかである。他の出土区についても第6表に示すとおり、ほぼ同様な動向である。

第5表 森本遺跡の石器観察表

※Hob: 姫島産黒曜石

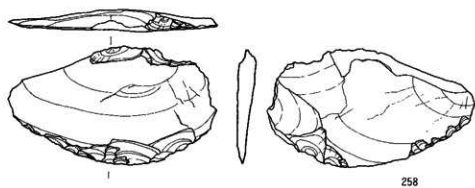
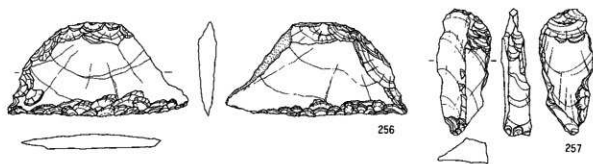
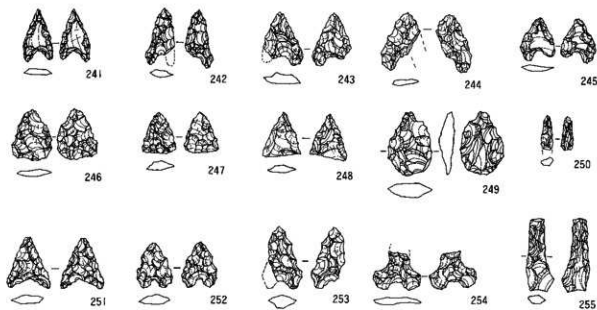
押込番号	出土区・遺物番号	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	石材
第28区 241	2集 1469	石 鏃	2.0	1.15	0.25	0.5	An
# 242	2集 523	#	2.2	1.1	0.3	0.5	Hob
# 243	2集 969	#	2.1	1.6	0.5	1.0	Hob
# 244	2集 547	#	2.3	1.55	0.4	0.7	Hob
# 245	2集 1461	#	1.65	1.4	0.25	0.5	An
# 246	2集 1818	#	2.0	1.6	0.3	0.8	Hob
# 247	B 2集中部	#	1.6	1.35	0.35	0.6	Hob
# 248	B 2集中部	#	1.8	1.55	0.25	0.6	An
# 249	C 3 S39	#	2.5	1.75	0.55		
# 250	2集 484	石 鏃	1.35	0.5	0.4	0.2	Hob
# 251	ラベル不明	石 鏃	2.0	1.8	0.35	0.8	Hob
# 252	ラベル不明	#	1.8	1.45	0.3	0.6	Hob
# 253	ラベル不明	#	1.9	1.35	0.55	0.9	Hob
# 254	ラベル不明	#	1.55	1.90	0.3	0.6	Hob
# 255	C 4 1138	石 鏃	2.85	1.10	0.4		
# 256	C 3 601	削 器	3.75	7.2	0.7	17.4	An
# 257	C 4	クサビ形石器	4.95	2.10	1.10		An
# 258	2集 765	削 器	4.65	8.3	0.7	29.3	An
第29区 259	2集 1663	扁平打製石斧	9.2	5.8	1.35	113.1	結晶片岩
# 260	2集 702	石 斧	11.35	5.2	2.05	169.0	結晶片岩
# 261		扁平打製石斧	12.0	6.5	1.9		
# 262	2集 1118	#	8.4	9.45	1.4	129.0	HG
# 263	C 4 474	石 斧	8.95	5.65	2.2	138.5	蛇紋岩
# 264	C 4 312	扁平打製石斧	10.05	9.75	1.1	156.7	HG
# 265	C 4 662	#	7.65	5.9	1.65	101.9	輝石安山岩
# 266	C 4 284	#	8.3	5.6	1.10	69.8	結晶片岩
# 267	C 4	#	10.7	5.7	1.0	102.7	結晶片岩
# 268	C 4 800	#	12.75	7.45	1.4	184.2	
# 269	C 4 273	石 核	9.8	4.1	2.4	73.6	Hob

第6表 石器・石材組成表

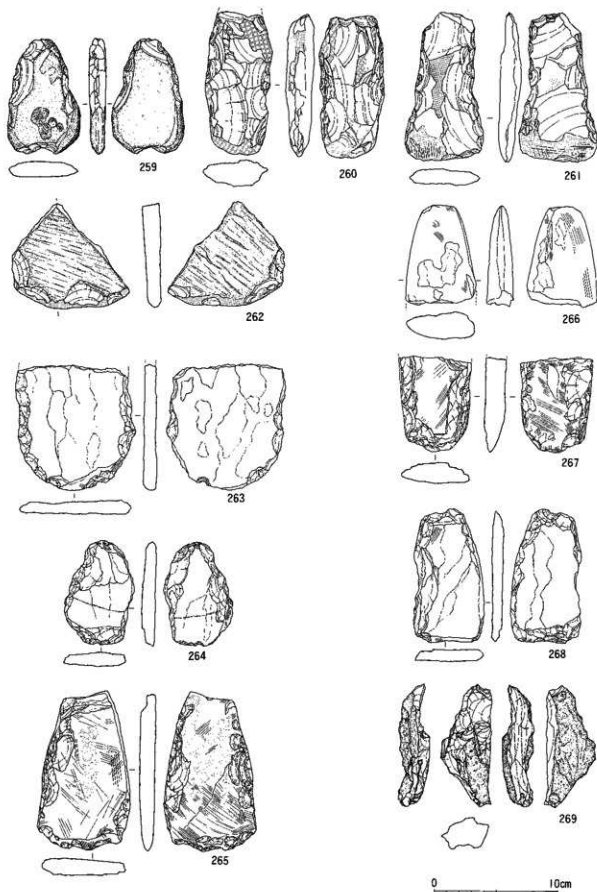
※()内は円礫・自然面を有するもの

出土地区	石材・器種	石 鏃	ステイバー	楔形石器	石 鏃	RF・UF	石 核	削片・砕片	石材別重量合計
2号集中部	姫島産黒曜石	14	1	1		4	10	286(2)	922.0g 94%
	サヌカイト	4	1					35	54.8g 5%
	ガラス質安山岩							2	7.0g 1%
B 4	姫島産黒曜石	9			1	7	9	215(1)	698.0g 88%
	サヌカイト	2		2				27	80.1g 10%
	ガラス質安山岩	1						2	12.4g 2%
B 5	姫島産黒曜石							2	12.1g
C 3	姫島産黒曜石	36	2	2		7	11	524	1535.4g 89%
	サヌカイト	3		6			1	31	168.7g 9.8%
	ガラス質安山岩			1				1	18.1g 1%
	黒色黒曜石			1				2	3.1g 0.2%
C 4	姫島産黒曜石	23	4	1		2	25	552(1)	2117.8g 92%
	サヌカイト	5		4	1	3	2	46	169.3g 7%
	ガラス質安山岩	1						7	21.0g 1%
	黒色黒曜石					1			0.9g
C 5	姫島産黒曜石						4	8	60.8g
D 4	姫島産黒曜石					1		9	31.1g
D 5	姫島産黒曜石						2	7	50.4g
東区	姫島産黒曜石	4	1	1		10	6	121(1)	613.2g
	サヌカイト						2	21	88.4g
	ガラス質安山岩							2	5.0g

注 第11区のとおりC 2, C 3区, B 4区の中には若干ながら突帯文期に所属する例が含まれる。



第28図 縄文時代後期一第2集中部と集中部外の遺物実測図



第29図 縄文時代後期一第2集中部と集中部外の遺物実測図

3. 弥生時代早期の遺構と遺物

(1) 遺構

遺構周辺の土は暗黄色系の砂質土である。この土を浅く掘り込んだのが本土坑である(第30図)。土坑が廃絶された後、やや風化した黒色系の砂質土が流入したことから、その平面形は比較的明瞭であった。その遺構は南北に約5m、東西幅は約2m程度が主要部分とし、これの南西部分に長軸2.5m、幅1.5mの浅い土坑が接続する。全体的な平面形は「鏡形」を示し、北端から南端までの長さは6mである。当然のことながら、弥生時代早期の遺物類はこの遺構内に最も多く、しかも大破片が多い。したがってこの土坑内と周辺の遺物(第1集中部)は極めて一括性が高いといえる。土坑外においての遺物は北東方向・南西方向に漸次減少しながら分布する。

(2) 土器

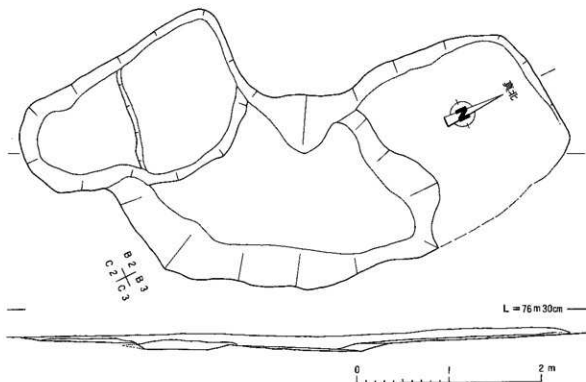
壺 壺は2点ある(第31図270・271)。いずれも焼成前の丹塗りが行われている他、研磨痕が観察される。後者は小破片である為に器形の傾きが不明瞭である。一方、前者は球形の胴部を有する壺の一部のようで、直線的に内傾する頸部から短く外反する口縁部に形態的特徴を持つ。

浅鉢A 胴部上部から頸部を内傾させ、端部を上方か外方へ短く曲げて口縁部とした一群である。これらは内傾する頸部が外反しながら立ち上る1類と(第31図278)、ほとんど外反しない一群の2類(第31図273・274・276・277)に区分できる。

浅鉢の紋様は、1類が口縁端部に刻目を入れる他、屈曲部の直上に沈線を施す。2類は沈線を口縁・頸部間と屈曲部の直上に施す場合がある。

浅鉢Aの調整と色調は、1類は内面が条痕調整後ナデで、外面も条痕調整後に上半だけをミガキとする。2類は内外ミガキを基本とする。色調は基本的に黒色～暗灰色で、縄文時代晩期の浅鉢と同じ技法を示す。

浅鉢B 胴部の傾斜がゆるやかに立ち上り、口頸部はわずかに内傾するもののおおむね上方に短くのびる。胴部は短く外方へ曲げて口縁部とする。図示した例は胴部の傾斜が35°のゆるやかさで立ち上る為、口径が26.2cmの



第30図 弥生時代早期—第1集中部内土坑実測図

大きさを有するもの器高は7cm前後と低いことが予想される(第31図275)。

浅鉢Bの紋様は口縁部直下にある。

浅鉢Bの調整は内外をナデた後ミガキである。なお色調は黒色である。

浅鉢C類 胴部が立ち上がった後、弓形に外反しながら上にのびる口頸部である。口縁部の一部には、端部を外方に曲げている部分もある(第31図280)。

浅鉢C類の紋様は、状況が不明確な胴部を除くと口縁端部に刻目を入れている。

浅鉢Cの調整と色調は次のとおりである。調整は内外面ナデ、色調は内外面とも褐色。

その他の浅鉢 口縁端部が斜行し、頸部と胴部の間に明瞭な段があるため方形浅鉢とも考えられる例がある(第31図272)。しかし、口縁部の内面に稜や沈線がないこと、外面に突帯状の隆線がないことや口縁部と頸部の区分ができないこと。また口縁端部から胴部までの間が短いことから、方形浅鉢とするには躊躇する例ではある。

壺A₁: 基本形は肩部から逆「く」字形に内傾する例(第33図289)。突帯の位置は口縁直下に位置する。壺A₁に相当する確実な例は1例だけであるが、小破片の中にはこれに当る例も予想できる。

壺A₂: 基本形は肩部から逆に「く」の字に内傾することを基調とする。これを基調として、内傾部分が外反しつつ立ち上がる点に特徴がある(第33図286・287、第34図290・291、第32図283・284、第35図303・308・310・314~317)。

壺A₃: 基本形はA₁・A₂を踏襲していると考えられる例であるが、肩部からの外反しつつ立ち上がる部分が更に上方へ開く点に特徴がある。この為、壺の最大径が肩部と口縁でほぼ同じか、後者がやや大きくなっている。この際、開き気味に立ち上がった胴部は程度の違いはあるが上端(口頸部と胴部の接点)に胴部最大径があり、胴部の上端が内側へすぼまるような取まり方ではない。(第33図288、第32図285)。

壺B 胴部が立ち上がり、胴部上端の付近がわずかに丸味を帯びながら内傾するように一担収まる。ここから口頸部が外反しつつ立ち上がる例である(第35図318・319)。したがって胴部の最大径の部分は、胴部上端(壺A₁~A₃における口頸部と胴部間の肩部)にあるのではなく、胴部上端から若干下った位置にある。

壺C 胴部・口頸部間がゆるく湾曲して口頸部が立ち上がる。この際、口頸部と胴部の境界ははっきりしないこと、口頸部がわずかに内傾すること、口縁端部が尖る、などの点に特徴がある(第34図292)。

壺D 砲弾形に立ち上がり、口縁部の上部で弓形に内湾する。口頸部と胴部の区分はできない。口縁端部が尖る(第34図293)。

壺類の文様と調整・色調は次のとおりである。文様は基本的に、口縁直下に突帯を入れて刻目を施す。その他、その断面形から壺A₁に近い例があり、これは口頸部と胴部屈折部に刻目を入れている(第31図282)。調整は平行~斜行する条痕調整を施し(口縁部は基本的に平行)、後に口頸部外面を軽くナデ消す例が多い。これに次いで口縁部内面を軽く消す例も多い。

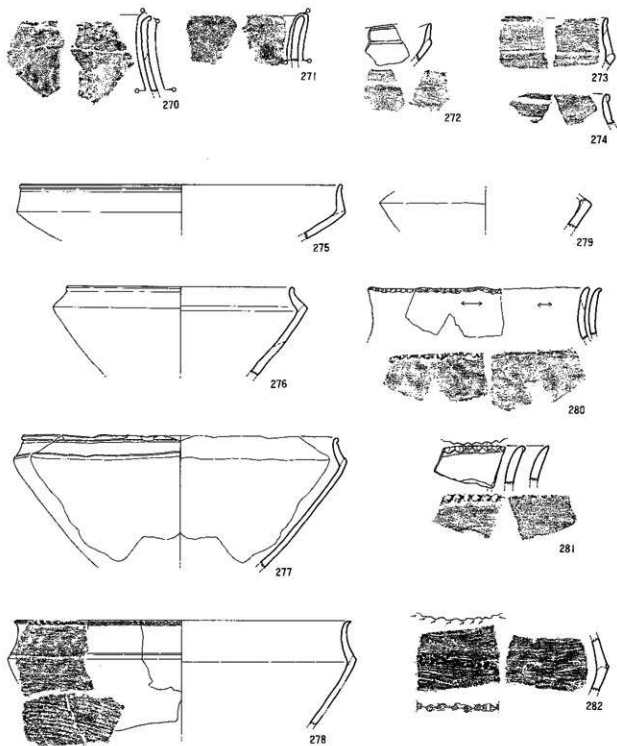
底部 図示にたえる例が8例ある。いずれも高台状に粘土を貼り付けている。調整はミガキを施す例と(第34図299・300)、ナデ・条痕を施す例がある(第34図294~298・301・302)。調整がミガキの例は土器の厚さが他の例に比べて薄いことから蓋の底部と考えられる。その他は壺類の底部であろう。

(2) 編年上の位置

森本遺跡第1集中部における土器群の特徴はこれまで記述してきたとおりである。その中で、壺・浅鉢・壺の器種構成からなり、壺の文様が一条刻目突帯文であること、底部が高台状の貼り付けであること、浅鉢は直上~内傾させて口縁端部を肥厚させる等々に特徴がある。これらの特徴は下黒野式土器群に対応するものであろう。

問題は下黒野遺跡出土の弥生時代早期に属する土器の量が多くないことから、遺跡形成期の土器群の実態を反映してない可能性の存在にある。しかし下黒野式が様式として設定されたのが下黒野遺跡出土の土器群であり、これが実態を反映した土器群である前提にたつて比較検証する。

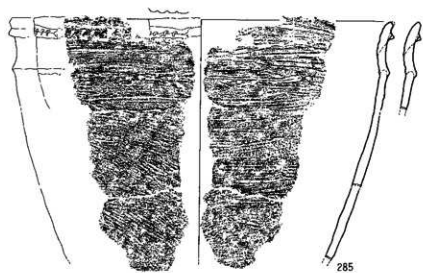
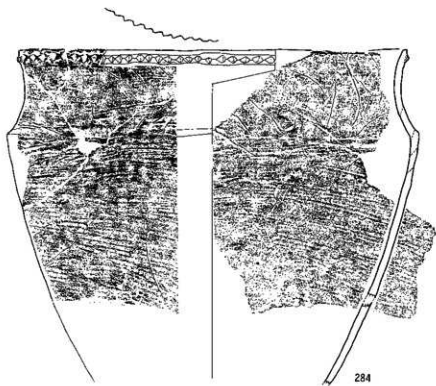
浅鉢は黒川式系統~カギ形(肥厚)口縁の浅鉢(高橋徹分類の浅鉢B群一下黒野遺跡例、大分県史2)がなく、逆「く」字形口縁を基調とした例に特徴がある。壺類の中でA₂は主体を占めている。この壺の特徴は口頸部が弓形に内湾することと、頸部間に段を有する特徴がある。壺Bはこれに加えて胴部の上位で若干のすぼまりを見



0 10cm

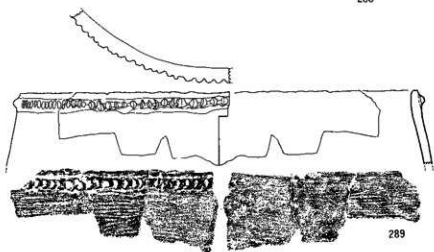
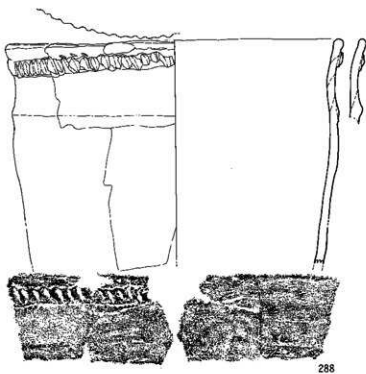
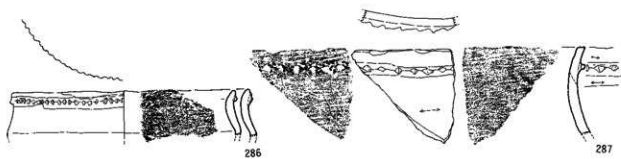
第31図 弥生時代早期—第1集中部の遺物実測図

※ 赤色顔料範囲



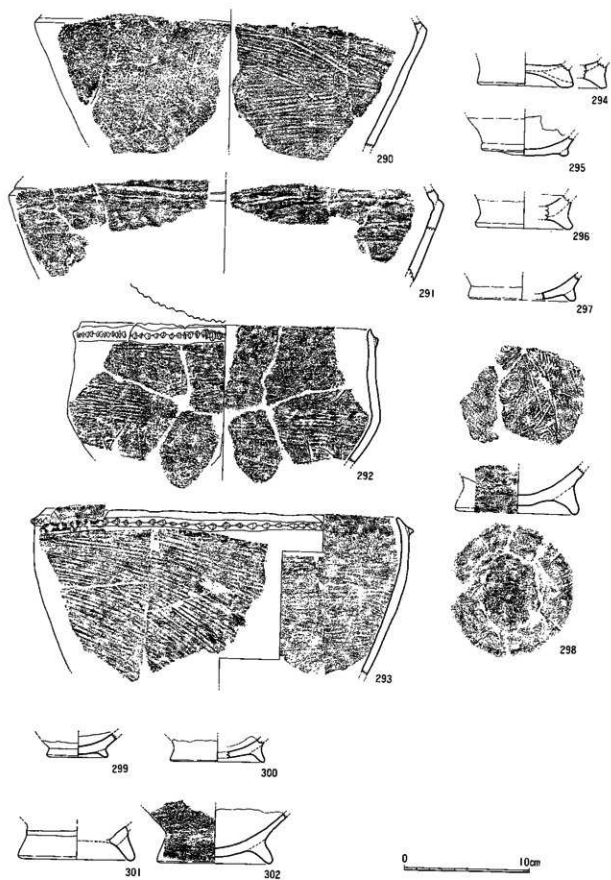
0 10cm

第32図 弥生時代早期一第1集中部の遺物実測図

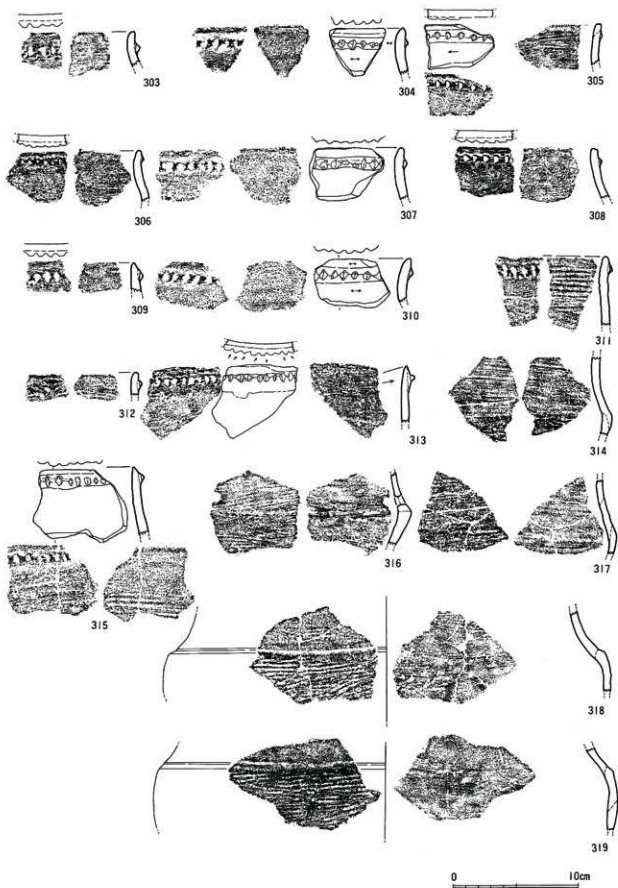


0 10cm

第33図 弥生時代早期一第1集中部の遺物実測図



第34図 弥生時代早期一第1集中部の遺物実測図



第35図 弥生時代早期一第1集中部の遺物実測図

第7表 弥生時代早期の土器観察表

標記番号	出土区	遺物番号	器種	胎土	色調		器面調整	法量(cm)		施文等
					内面	外面		口径	器高 底径	
第100	1集	295	甕	白色粒多量	暗灰色	黄灰色	内・外面ナデ			
#	271	1集	136	粒状・角閃石多量	黄灰色(赤)	黄灰色(赤)	内・外面ミガキ			内・外面に朱を塗る
#	272	B.3	118	洗鉢 白色粒多量、微細な粘土	暗灰色	黄灰色	内・外面ヘラミガキ			
#	273	B.3	95	洗鉢 白色粒、石炭粒	黒色	黄灰色	内・外面粗いハツミガキ			
#	274	B.3	440	洗鉢 白色粒若干	黒色	黒色	内・外面ミガキ			外面沈線2本
#	275	1集	504,367	洗鉢 角閃石・雲母・斜長石多量	黒色	上半部黒色 下半部黒色	内・外面ナデ後ミガキ	26.2		外面沈い花線1本
#	276	1集	458	洗鉢 白色粒多量、角閃石若干	暗灰色	暗褐色	内・外面ミガキ	18.2		
#	277	1集	561	洗鉢 白色粒ヘラミ	黒色	上半部黒色 下半部黒色	内・外面ヘラミガキ	25.6		外面沈線2本
#	278	1集	136,182	洗鉢 白色粒多量	褐色	暗灰色	内面2枚貝多量後ナデ外面 上部ミガキ製部2枚貝条痕	27.3		口縁端部に刷目目
#	279	1集	82	洗鉢 白色粒多量、角閃石若干	暗褐色	暗褐色	内面ナデ、外面ミガキ			
#	280	1集	83	洗鉢 角閃石若干	褐色	褐色	内・外面ナデ	17.9		口縁端部に刷目目
#	281	B.3	22	洗鉢 白色粒・角閃石微量	黒色	黄灰色	内・外面ナデ			口縁端部に刷目目
#	282	1集	55	甕 白色粒多量、角閃石・石炭粒若干	暗灰色	黄灰色	内面ナデ下部に板付 内・外面側部2枚貝条痕後 ナデ 製部2枚貝条痕	32.6		底面に刷目目
第100	250	1集	132	甕 白色粒多量	暗褐色	上半部褐色 下半部褐色	内・外面側部2枚貝条痕後 ナデ 製部2枚貝条痕	31.6		突帯に刷目目
#	285	1集	54	甕 白色粒多量、石炭微量	褐色	褐色	内面2枚貝条痕 外面粗いナデ	31.4		突帯に刷目目
第100	286	1集	372,374 381,551	甕 白色粒多量、斜長石・角閃石若干	黒色	暗褐色	内・外面ヘラミ、具による ナデ	18.1		突帯に刷目目
#	287	1集	163	甕 石炭多量、角閃石若干	褐色	黄灰色	内面粗い板付 外面粗いナデ			突帯に刷目目
#	288	1集	20,292 159,78	甕 白色粒多量	黒色	黒色	内・外面ナデ後粗いミガキ	27.3		突帯に刷目目
#	289	1集	52,274	甕 石英・白色粒多量	黒色	黄灰色	内・外面側方向の2枚貝条痕 突帯貼付部上下ナデ	32.3		突帯に刷目目
第100	290	1集	123	甕 斜長石・白色粒・角閃石多量	黒色	褐色	内面2枚貝条痕 外面不明			
#	291	1集	161	甕 赤土色粒(大)	暗灰色	赤灰色	内面粗い板付 外面粗いナデ			
#	292	1集	360,377 415,429	甕 白色粒多量	暗灰色	茶褐色	内・外面2枚貝条痕後ナデ 突帯上部はナデで貼付	23.6		浅い沈線1本
#	293	1集	56,278 136,167	甕 白色粒多量、雲母若干	黒色	黒色	内面粗い板付 外面粗いナデ 突帯上部は粗い板付ナデ	28.6		突帯に刷目目
#	294	1集	274	石炭・赤土多量	暗灰色	黄褐色	内・外面ナデ		7.8	
#	295	1集	239	石炭多量	褐色	茶褐色	内面2枚貝条痕後ナデ 外面ナデ		7.0	
#	296	1集	421	白色粒多量、角閃石若干	暗褐色	茶褐色	内・外面ナデ		8.0	
#	297	1集	127	白色粒多量、石英若干	暗褐色	茶褐色	内・外面ナデ		8.5	
#	298	1集	176	白色粒多量	暗褐色	赤褐色	内・外面2枚貝条痕		9.8	
#	299	B.3	273	白色粒多量	黒色	褐色	内面ナデ、具による板付ナデ		4.9	
#	300	1集	443	白色粒多量、角閃石若干	暗灰色	茶褐色	内面2枚ミガキ 具ミガキ		7.6	
#	301	B.3	136	白色粒多量	黄灰色	黄灰色	内・外面ナデ		9.4	
#	302	1集	329	白色粒多量	茶褐色	黄灰色	内面茶色後ナデ 外面条痕		9.2	
第100	303	1集	137	甕 白色粒多量	黄灰色	黒色	内・外面ナデ			突帯に刷目目
#	304	B.3	S77	甕 白色粒多量、角閃石若干	黄灰色	黒色	内・外面ナデ			突帯に刷目目
#	305	1集	213	甕 白色粒多量	暗褐色	暗灰色	内面2枚貝条痕後ナデ 外面ナデ			突帯に刷目目
#	306	1集	124	洗鉢 長石・角閃石多量	黒色	褐色	内・外面ナデ			突帯に刷目目
#	307	B.3	85	洗鉢 白色粒多量、角閃石若干	黄灰色	黄灰色	内・外面ナデ			突帯に刷目目
#	308	1集	158	洗鉢 白色粒多量、角閃石若干	褐色	暗灰色	内・外面ナデ			突帯に刷目目
#	309	1集	144	洗鉢 白色・赤土色粒若干	黒色	黄灰色	内・外面ナデ			突帯に刷目目
#	310	B.3	209	洗鉢 白色粒多量、角閃石若干	暗灰色	茶褐色	内・外面ナデ			突帯に刷目目
#	311	1集	42	洗鉢 白色粒多量、角閃石若干	黒色	褐色	内面2枚貝条痕 外面ナデ			突帯に刷目目
#	312	1集	3	甕 白色粒多量	黒褐色	黒褐色	内・外面ナデ			突帯に刷目目
#	313	1集	138	甕 白色粒多量	暗灰色	茶褐色	内・外面ヨコナデ			突帯に刷目目
#	314	1集	164	甕 白色粒	黄灰色	褐色	内・外面2枚貝条痕			突帯に刷目目
#	315	B.3	267	甕 白色粒多量、角閃石・金雲母微量	茶褐色	黄灰色	内・外面2枚貝条痕			突帯に刷目目
#	316	1集	32	甕 白色粒多量、角閃石若干	褐色	上半部褐色 下半部褐色	内面上部ナデ下部粗いナデ 外面条痕後粗いナデ			突帯に刷目目 穿孔有り
#	317	1集	232	甕 白色粒	黄灰色	暗褐色	内・外面条痕後ナデ			
#	318	1集	188	甕 白色粒多量、角閃石微量	暗灰色	褐色	内面ナデ 外面側部条痕後 ナデ・ミガキ製部条痕			浅い沈線1本
#	319	1集	189	甕 白色粒多量、赤土色微量	暗灰色	茶褐色	内面ナデ 外面側部条痕後 ナデ・ミガキ製部条痕			浅い沈線1本

せる。これらの特徴は近畿・瀬戸内に分布しており、そうした地域からの影響下に顕現したといえよう。

甕C・甕Dにみられる胴部・口頸部の区分がはっきりしない器形であり、甕A・甕Bは下黒野遺跡には存在していない。とりわけ甕D、口縁端部が若干とがること、その調整が条痕調整であることを除けば下城式古段階の甕に極めて類似した器形であり、1型式～2型式後に下城式甕の成立を予感できる例である。類例は、伊崎俊秋氏によって今川I式(夜白式+板付I式)とされたなかにも含まれている(伊崎1981)。甕A₃のように口頸部と胴部の屈曲がほとんどない器形は、近畿・瀬戸内では長原式段階、九州では夜白II₂式段階という新しい様相の突帯文土器期に観察される。

上述したことを考慮すると森本遺跡第1集中部の土器群は下黒野遺跡の下黒野式土器群より新しく位置づけるのが自然であろう。北部九州との平行関係で言えば、板付I式を共伴する夜白II式段階が森本の時期ということになろう。森本の土器群をこのように位置づけると、高橋徹氏によって位置づけられた下黒野式(夜白I式並行)と合わなくなる。ここで下黒野式に後続する段階として森本遺跡第1集中部の土器群を森本式として位置づけた

い。一方、大分県大野郡大野町所在の神原遺跡では無刻目突帯文と一条目突帯文・黒川式系統〜カギ形（肥厚）口縁浅鉢、壺が出土している。更に神原では口縁下に沈線・段をつくり、頸が長く肩部が強く突出し、肩の上下等に沈線をめぐらした曲り田古式に類似の浅鉢などが集中して出土している。当初、下黒野式古相と認識していた神原遺跡の土器群を神原段階として下黒野遺跡の下黒野式より古く位置づけたい。整理すると東九州の刻目突帯文土器群の変遷は、上管生B式直後の神原段階→下黒野式→森本式と変遷する。

参考文献

伊崎俊秋1981「V-2弥生時代の遺構と遺物」「今川遺跡」「津屋崎町文化財調査報告書」第4集、津屋崎町教育委員会刊、福岡。

高橋 徹1983.8「東九州における突帯文土器とその周辺」「古文化談叢」第12集、九州古文化研究会刊、北九州、P63〜75。

高橋 徹1989「第二節 弥生文化の成立」「大分県史」先史篇II・大分県刊、大分P19〜37。

綿貫俊一1991「川南原遺跡群発掘調査報告書」「大分県文化財調査報告書」第84集、大分県教育委員会刊 大分。

(3) 石器類

第8表の石器・石材組成表は第1集中部・B2区・B3区・C2区から出土した小型の石器・剥片類のうちわけである。これらの地区ではおおむね弥生時代早期（刻目突帯文土器期）に属する土器が比較的多く、石器・剥片類もこれに準じて考えられよう。しかし、隣接する三万田式土器分布域と突帯文土器分布域の凡よその境界は第11図のとおりであるが、第8表では厳密な意味での区分は行っていない。厳密な意味で刻目突帯文期に属するのは第1集中部とB2区の石器類である。

第1集中部は平面形が屈折する土坑内を中心に突帯文土器期の遺物が密集する部分である。ここから回収された石器・剥片類のうち最も多いのが4cmまでの長さを中心とする剥片・砕片である。これは、石器の数量・小規模な剥片が大半であることからみると、石鏃を中心とした小形石器の製作に関わる状況を示していると言える。

第8表に示された第1集中部の道具としての石器は、狩猟具=石鏃20点、切削具=スクレイパー1点、削片具=R F・U F 5点、加工具=石錐1点、工具=楔形石器3点からなる。その他、伐採具=石斧1点がある。やはり狩猟に用いられることの多い石鏃20点が目を引く。

第1集中部やその周辺で回収された突帯紋土器群にともなう石鏃は、平面形が二等辺三角形をとる例が大半で、わずかに抉りを加えた例は2点にすぎない。石鏃の法量は長さ2.9cm〜6.7cm、幅が1.3〜1.9cm、厚さ0.3〜0.7cmの領域に取まる。この石鏃がもつ属性のうち、特徴的なことは平面形が二等辺三角形であることにつける。この平面形は、北部九州地区における当該期の石鏃と共通である。

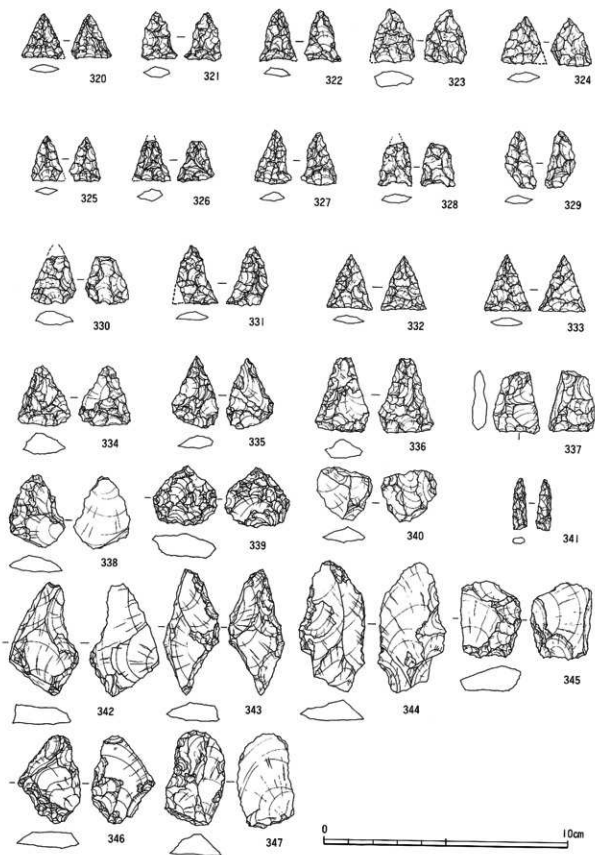
石材はおおむね姫島産黒曜石・サヌカイト・ガラス質安山岩からなっている（第8表）。最も多く利用されている石材は姫島産黒曜石である。姫島という近隣の原産地がひかえていることもあり、第1集中部では608.5gの

第8表 石器・石材組成表

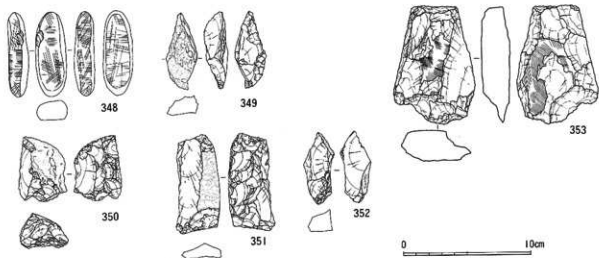
※（ ）内は円鏃・自然面を有するもの数

出土地区	石材・器種	石 鏃	スクレイパー	楔形石器	石 錐	R F・U F	石 核	剥片・砕片		
1号集中部	姫島産黒曜石	18	1				4	5(1)	165	608.5g 88.5%
	サヌカイト	2		3	1	1	1	30	71.3g	10.5%
	ガラス質安山岩							2	7.6g	1%
B 2	姫島産黒曜石	1		2			1	3	35	151.3g 77%
	サヌカイト	3						3	30.2g	15%
	ガラス質安山岩							1	15.3g	18%
B 3	姫島産黒曜石	23		4			10	18	330(4)	1517.7g 90%
	サヌカイト	5		7				1	41	135.9g 8%
	ガラス質安山岩								3	28.3g 2%
C 2	姫島産黒曜石	6	2	2				6	32	159.7g 90%
	サヌカイト	1		1					7	17.8g 10%

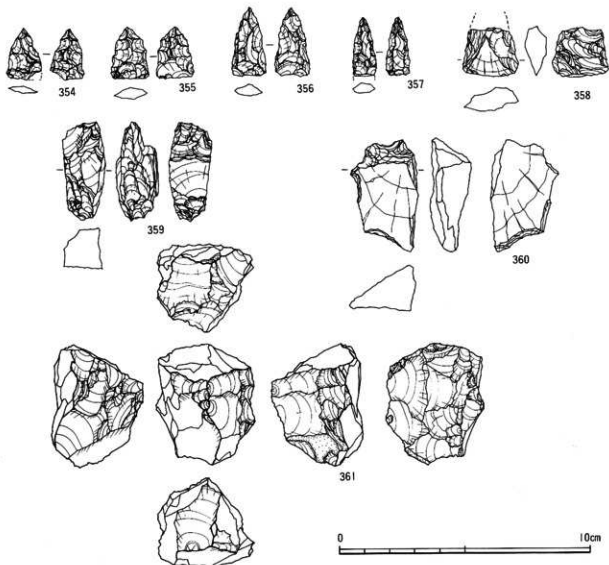
注 第11図のとおり、B3区・C2区の石器の中には若干ながら三万田式期に所属する例を含むことが予想される。



第36図 弥生時代早期一第1集中部の遺物実測図



第37図 弥生時代早期一第1集中部の遺物実測図



第38図 弥生時代早期一第1集中部の遺物実測図

第9表 弥生時代早期-第1集中部とその周辺の石器観察表

*Hob: 姫島産黒曜石、An: 安山岩、C: チャート

採回番号	遺物番号	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	石材
第36回 320	1集 114	石 鏃	1.8	1.7	0.3	0.9	Hob
〃 321	1集 140	〃	1.95	1.5	0.4	1.0	Hob
〃 322	1集 402	〃	2.10	1.45	0.35	1.0	Hob
〃 323	1集 601	〃	2.1	1.7	0.65	2.1	Hob
〃 324	1集 514	〃	1.95	1.65	0.35	0.9	Hob
〃 325	1集 268	〃	1.8	1.3	0.25	0.4	Hob
〃 326	1集 267	〃	1.7	1.5	0.35	0.8	Hob
〃 327	1集 384	〃	2.2	1.5	0.4	0.9	Hob
〃 328	1集 496	〃	1.7	1.4	0.3	0.8	An
〃 329	1集 518	〃	2.25	1.3	0.3	0.6	Hob
〃 330	1集 346	〃	1.95	1.8	0.55	1.5	Hob
〃 331	1集 112	〃	2.4	1.7	0.3	1.2	Hob
〃 332	1集 385	〃	2.25	1.85	0.3	1.1	Hob
〃 333	1集 355	〃	2.3	1.9	0.3	1.1	Hob
〃 334	1集 250	〃	2.4	2.1	0.95	3.0	Hob
〃 335	1集 5	〃	3.0	1.95	0.55	2.4	Hob
〃 336	1集 612	〃	3.05	2.2	0.7	3.5	Hob
〃 337	1集 430	〃	1.9	2.5	0.6	2.9	Hob
〃 338	1集 30	(未成品)	2.95	2.25	0.6	3.0	Hob
〃 339	1集 510	(〃)	2.4	2.65	0.9	6.2	C
〃 340	1集 386	(〃)	2.15	2.25	0.7	2.8	Hob
〃 341	1集 34	石 鏃	2.1	0.6	0.3	0.4	An
〃 342	1集 610	スクレイパー	4.5	2.8	0.85	9.7	An
〃 343	1集 141	〃	5.1	0.8	2.3	7.8	An
〃 344	1集 622	〃	5.3	2.65	0.8	10.1	An
〃 345	1集 519	〃	3.1	2.5	1.0	7.6	HG
〃 346	1集 193	〃	3.55	2.55	0.65	5.4	Hob
〃 347	1集 106	〃	3.85	2.4	1.0	7.6	Hob
第37回 348	1集 379	装身具未成品	6.6	2.3	1.5	37.1	輝犯片岩
〃 349	1集 362	スクレイパー	6.0	2.4	1.7	16.2	Hob
〃 350	1集 350	石 核	5.1	3.75	2.6	44.8	Hob
〃 351	1集 488	〃	7.35	3.05	1.6	35.1	Hob
〃 352	1集 178	〃	5.55	2.45	2.0	20.2	Hob
〃 353	1集 40	〃	9.2	6.45	2.3	146.6	結晶片岩
第38回 354	B 2-19	石 鏃	2.05	1.4	0.3	0.6	An
〃 355	B 2-27	〃	2.05	1.5	0.5	1.2	Hob
〃 356	B 3-9	〃	2.75	1.4	0.4	1.3	An
〃 357	B 2集中部	〃	2.3	0.95	0.45	1.0	An
〃 358	B 3-291	〃	1.9	2.2	0.9		
〃 359	B 3-208	〃	3.85	1.7	1.65		Hob
〃 360	B 2-4	スクレイパー	4.4	2.65	1.60	14.8	HG
〃 361	B 3-218	石 核	4.75	3.9	3.4	61.8	Hob

黒曜石が持ち込まれ、193点の標本から構成されている。これにつぐのは金山産で大半がサマカイトで、71.3gが持ち込まれ、38点の標本で構成される。他はガラス質安山岩と呼ばれる姫島東部で産出する石材で、2点で7.6gからなる。この石材は横手遺跡群内の陽弓遺跡・国広遺跡においても、縄文時代早期の遺物群中に多く見られる。これに関して森本遺跡の北に所在する神社近くの地層断面にも縄文時代早期の包含層が観察されており、ガラス質安山岩はこれに由来する可能性がある。この石材については他の地区や集中部についても同様に言えよう。石材構成比は各地区・集中部とも姫島産黒曜石が90%~70%前後、サマカイトが10%前後、ガラス質安山岩が8%~1%である。

(綿貫)



9. 森本遺跡遠景（上方右の重機があるところ、手前は国広遺跡）

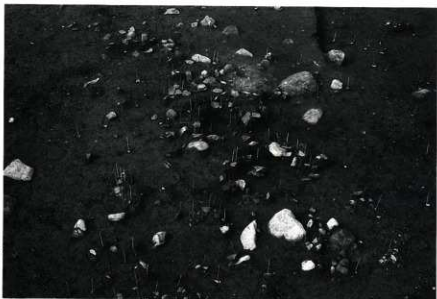


10. 森本遺跡近景（上方の集落付近が陽弓）

11. 第2集中部出土状態
(縄文時代後期)



12. 第1集中部出土状態
(弥生時代早期)



13. 第1集中部土坑
(弥生時代早期)

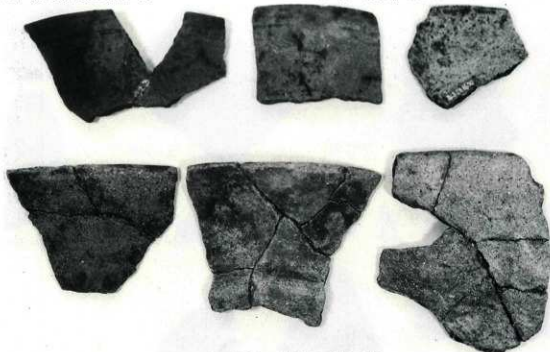




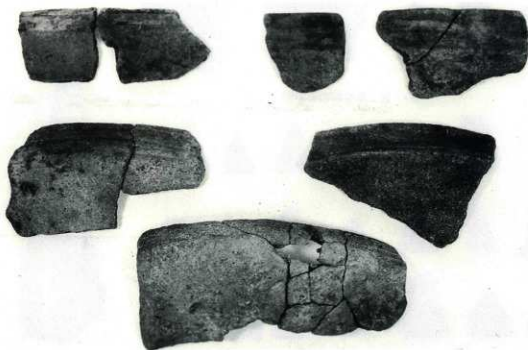
14. 第2集中部の鉢形土器



15. 第2集中部の浅鉢形土器



16. 第2集中部の浅鉢形・鉢形土器



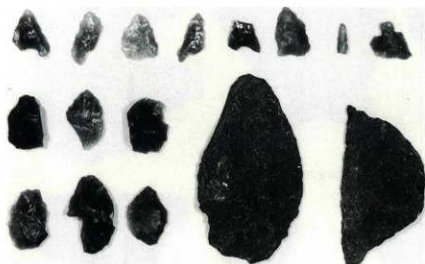
17. 第2集中部の浅鉢形土器



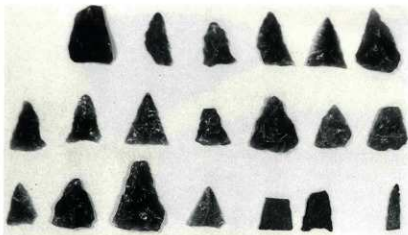
18. 第2集中部の各種土器



20. 第2集中部の石器類



19. 第2集中部の石器類



21. 第1集中部の石器類



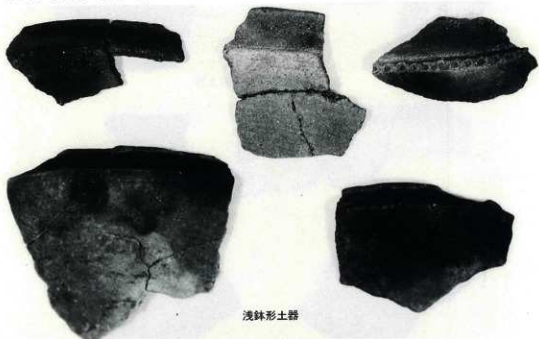
22. 第1集中部の装身具
未製品・石斧



23. 第1集中部の壺形土器



24. 第1集中部の壺形土器



浅鉢形土器



壺形土器



壺形土器



壺形土器



壺形土器

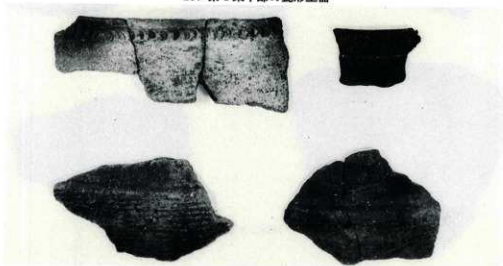


壺形土器

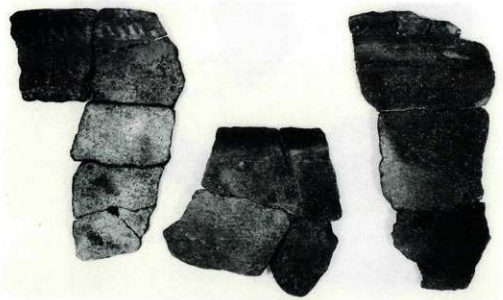
25. 第1集中部の壺形土器・浅鉢形土器・壺形土器



26. 第1集中部の変形土器



27. 第1集中部の変形土器



28. 第1集中部の変形土器